
凍て蝶

紅波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凍て蝶

【Nコード】

N9047J

【作者名】

紅波

【あらすじ】

春から私立江戸川学園へやってきた新任保健医とミステリアスなクールビューティーとちょっと胡散臭い生徒会長とその他諸々の学園ライフ。

新志（新哀）学園パロ。ゆったりまったり基本トライアングラーにラブコメ、ときどきシリアスちょこつとバイオレンスに連載中。

1 (前書き)

学園パロです。

カップリング的には名前で行くと一応新哀ですが、実質は新志と新哀の間くらい。

苦手な人は引き返してください。

マナーのない誹謗中傷はご遠慮ください。感想はどしどしお受けします。

春の陽射しというのは得てして柔らかく暖かく心地の良いもので、それに加えてそよそよと花の香りがする春風が吹こうものならば、それはもう穏やかな気持ちに身を任せ眠りにつきなさいとの神様の思し召しだと新一は確信している。

桜の花びらはもう散って無くなってしまっているが、桜並木の下にある塗装の剥げかかったベンチに腰掛けてぼーっとグラウンドを見るともなく眺めている。

グラウンドではジャージにTシャツの高校生たちがめいめいにバレーボールを上げたりサッカーボールを追いかけていたりする。

「工藤センサー！」

掛けられた声にうとうととしていた意識を引き戻して眼の焦点を合わせると、少し離れたところから三年生と思しき青のラインのジャージを纏った女子生徒たちが手を振っていた。

「ボールとつてくださあい！」

続いた言葉に足下を見れば、ベンチの横脇にバレーボールが転がっている。

立ち上がり手を挙げて女子生徒たちに了解の意を示すと、サッカーボールの要領で掬い上げるようにバレーボールを足先だけで跳ねさせる。そのまま膝でワンバウンドさせてから両手に納め、彼女達に向かつて転がしてやった。

ありがとうございまーす、と口々に声がかかるのに、笑い返してやる。色めき立つような女の子の声が聞こえたのに敢えて知らぬフリをすると、腕を広げて伸びをした。

「……………ねっみい……」

ふああ、と欠伸をする。

晴天でスポーツには持って来いの本日は、この江戸川高校の球技大会だった。

年内に何回かある球技大会のうちの、一回目の今日明日のこれは入学して間もない新入生との交流を目的とするもので、教師陣にとつては入学式ではわからなかった問題児を見つけたり、はたまた顧問を担当する部活へ勧誘する生徒を品定めするのに役だったりする行事でもある。

言うなれば新顔のお披露目会みたいなものだ。

とはいっても今年度から保健医としてこの高校に赴任した新一にとつてはほとんどの生徒が新顔に等しい。

知った顔と言えば入学式に早速ぶつたおれた生徒か、新任の若い保健医を興味本位で見に来た生徒か　とにかくここ三週間の間に保健室に来た生徒くらいだ。

まあ、着任の際にステージ上で挨拶はしたので、関わったことのない生徒にも一方的に知られていたりする。さっきの女子生徒たちも然りだ。

如何せん保健医なので、特に怪我人も体調不良者も出ていない今はテントの張られた大会本部でぼへっと競技を見るのではなく見回りをしなくてはならない。

普段来ている白衣も脱いで、黒地にゴールドのラインロゴが入ったジャージを身につけているため、工藤先生なんだか高校生に見えますねえと同僚の女教師に言われた。

不意に、横を歩いてきたコートがわあつと盛り上がった。それと同時にホイッスルの高い音がして、試合終了が告げられる。

その音になんとか振り返ったと同時に、どん、と誰かにぶつかった。

新一も不用意に振り向いたわけだが、相手も結構な速さで歩いていたらしく、当たった衝撃で新一はよろめいた。

慌てて体制を立て直すと、ぶつかつた相手を探す。

見ると、ワインレッドのジャージを履いた女子生徒が尻もちをついて額を押さえ俯いていた。やべえ、と新一は胸中で思った。

(保健医が怪我させたとか笑えねー！)

どうやらジャストなタイミングで振り返つた新一の肩が、これまたジャストな位置にあつた少女の額に当たつたらしく、新一の肩から伝わつた衝撃から考えると相当に痛かつただらうと思われる。

「だ、大丈夫か…？」

少女の前にしゃがみ込んで恐る恐る尋ねると、少女ははつと顔を上げた。

新一は思わず瞠目した。

赤っぽい、明るい茶色のボブヘアが動きにあわせてふわりと流れた。漸く覗いた顔は透き通るように白く、小さくて整つた輪郭の中につり上がり気味だが大きな眼と、すつと通つた鼻筋と、小さめの唇がある。

引き込むようなグリーンアイは、動揺と焦りをない交ぜにしたよう

に揺れた。

「…っ、どいて…！」

固まっている新一を押しとばすようにしながら立ち上がって、いきなりすることに受けきれなかった新一が尻もちをつくの構わず、その女生徒は観戦する生徒で溢れかえる中に消えてしまった。

呆然としながら少女が消えていった方向を見つめる。

（え、ええ？）

混乱しつつ、取り敢えず何時までも座り込んでいるわけにいかない
のでジャージを叩きながら立ち上がる。

工藤先生だいじょーぶー？と擦れ違いに茶化すように声を掛ける生徒たちに曖昧な笑みで応えながら、新一は再び少女が走り去った方向へ目をやった。

（…なんだっただ？）

普通はぶつかれば少なからず謝るものだろう。確かにさっきのは新一も悪いし少女は転けてしまったわけだから彼女から謝る必要は必ずしもないが、だからって突き飛ばさなくても、と新一は思う。それに少女はなんだか焦っているようだった。なにかに追われているような。

(…それにしても …)

「びっしょりびしょー…」

しかも、超絶、がつくほどの。

うーん、となんとなく唸りながらりと頭を掻く。

見上げられた時の、あの意志の強そうな瞳を思い出す。
思わず助け起こすのも忘れて魅入ってしまった。

今時の高校生は大抵どの女子生徒も洒落ていて垢抜けている。化粧だつてしていたり、校則違反だが髪を染めたりパーマをあてている生徒までいる。

だがあれは別格だ。

髪の毛は地毛にしては明るすぎるが不自然さは全くなかった。

一目だから自信はないが恐らく化粧もしていない。

自然で、洗練された美しさだ。

高校生であれとは、未恐ろしい。

腕を組んでそんなことを考えていると、先ほど試合の終わったコート
のほうから、見知った少女が顔を出した。少女は新一と目が合う
と、ぱつと顔を輝かせる。

「あ！新一おに…じゃなかった、工藤先生だ！」

おかつぱにカチューシャをつけたその生徒は、嬉しそうに笑う。名前
前を呼び直したのに新一が苦笑する。

保健医としてこの学校に来る以前から、近所のお兄さんとして接し
てきた新一の呼称を、少女は未だに癖で口にしてしまうようだった。

「よう、歩美。勝ったのか？」

歩美の背後にいる友人らしき生徒がバレーボールを持っているのを見て、新一が尋ねる。

「うん！圧勝だよ。アタック決めちゃった！」

ブイサインして笑う歩美に、よかったなと新一が微笑む。

しかし直ぐに何かを思い出したように、「あ、でも…。」と言って歩美の表情は陰った。

「どうかしたのか？」

怪我でもしたのかと新一が眉を寄せて問いかけると、歩美は首を振った。

「ただね、応援来てねって言ってた友達見なかったから…。やっぱり来てくれなかったのかなあ」

「約束してたのか？」

「うっん、歩美が一方的に言っただけ。なんだか、クールな女の子でね、喘息持ちで風邪気味だからって今日も参加せずに教室にいるみたいだったから、絶対勝つから応援来てねって言ったんだけど…」

試合終わってから見渡したけどいなかっただんだ、としゅんとする。

うなだれる歩美の頭にぼんぼんと軽く手を触れて笑う。

「まあそう落ち込むな。見つけれなかっただけかもだし」

新一の言葉に、そうだねと頷いて、歩美はありがとうと言うと次の試合に出るべく去っていった。

くるくるとかわる歩美の表情を思い出しながら新一は、あれが一般的な女子高生だよなあと思う。

そうしてその直ぐ後には、やはり先程の、強烈とも言える緑の瞳を思い出すのだった。

t o b e c o t i n u e d …

ざん、と乾いた音をたてて大きく揺れたゴールネットに、周りからの歓声と近くからのブーイングが起こる。

「ずりいよー！工藤先生大人げねー！」

新一に見事にディフェンスを破られた生徒が、ぎゃあぎゃああと新一に軽いパンチをくらわしてくる。それにふふんと不敵な笑みを返しながら、たった今ゴールを決めた新一は前髪を掻き上げた。

「ばーろー！いい大人ってのは何事にも全力で挑むもんなんだよ。悔しかったらゴールしてみろ」

「ぐああ腹立つ！なんでこんなエセ保健医がモテんだ！」

「ま、大人の魅力ってやつだな、」

新一の言葉に、ぜってえ倒す！と自棄気味で叫んで、その男子生徒はボールに向かって駆けていく。

球技大会二日目の今日は、昨日の予選で勝ち上がったチームの試合、教師陣も混じって試合など様々だ。

新一は保健医のため遠慮したのだが、若くてスポーツを進んでするような教師が少ないのもあって、年配の女教師に救護テントを預けようとして生徒に混ざっている。

サッカーは小中高と続けていたのでかなり得意だ。超高校生級と言われたほどに。

元来負けず嫌いな性格上、生徒相手にも手を抜かない。わかっている、大人げないなんて今更だと聞き直ってみる。

しかしやっぱり徐々に本格的なスポーツをすると、どうにも体力低下を自覚せざるを得ない。

所詮自分も現代っ子だ。車や電車で移動するし、どちらかと言えばインドア派だし、保健医なんて専らデスクワークだ。

加えて、喫煙もするし、料理は苦手ではないが独り身なため栄養も偏りがちな成人病予備軍である。

若いていいよなあとなんだか感慨深い気持ちでオヤジ臭いことを思いながら、ふうと息を吐く。

途端に、ばしんと背中を叩かれた。

「オイコラおっさん。なあに休んでんだよ！ゲームはこれからだぜ」

ホイッスルを口に加えて、にやにやと笑いながら生徒が言う。じとりと新一は半眼でその生徒を恨めしげに睨んだ。

「うっせー黒羽。運動不足の二十代なめんなよ？だいたいなんでオ

メーが審判してんだよ。審判はサッカー部担当だろうが」

「人数足りないからお手伝いしてんの！ほら、俺ってばなんでもできちゃうしー？」

ハハハハと胡散臭く笑いながら黒羽は新一と肩を組む。

へえへえそりやまたすげえこつて、と新一は適当な返事を返した。プレーしているわけでもないのに、審判している黒羽にむかってそこかしこから「会長ー！」と歓声がかかって手が振られている。ついでに新一にも「工藤先生ー！」と同様に声がかけられた。

「いやあ、生徒会長つつつのも人気モノで辛いね！」

「全く辛そうに見えねーけどな」

むしろ楽しそうだがなと、へらへらと手を振り返す黒羽に、新一が突っ込む。

黒羽はこう見えて生徒にも教師にも受けのいい生徒だ。生徒会長としても定評がある。成績も人あたりも良く、ついでに容姿もいい。

コートの脇で話している二人の前を、ゲームしている生徒が行き来している。

いつまでたってもプレーにもどらない新一に、味方側の生徒が不満げに新一を呼んだ。

「いや、俺行こうにも捕まっただけけどコイツに」

「あ！俺のせいにしちゃうわけ？親切にも息切らした先生のために時間稼ぎしてるっていう俺の気遣いがわっかんないかねー？」

「なら俺と入れ替わってくれ。オメーならバレねえ」

芝居がかった口調でおいおいと泣きついてくる黒羽に、少しも動じず新一が零す。

実際新一と黒羽は、実は生き別れた兄弟なのではと噂がだつたくらい顔が似ている。

見分けがつかないほどではないが、兄と弟と言われれば疑いなく受け入れられるだろう。

そんなくだらないことを言っていると、不意にわあつと周囲が沸き立った。相手側が得点を入れたらしい。

渋い顔をして、生徒たちがこちらに戻ってくる。

「センサー！油売ってねえでプレーしてくれよ。ゴールされちったじゃん！」

「いやいや俺あてにすんじゃねえよ。自分たちでなんとかしようと思わねえのかあ？」

新一の言葉にわあわあと生徒たちが不満げに声を上げる。

「わかってるけどさあ。どーしても勝ちたいんすよ！ゴールしなくともいいっすからシュート回してくださいよー」

女子が見てる前で負けたくないじゃん、と高校生らしいことを言っ
て生徒たちが請うてくる。

「女子ねえ……」

アホらし、と思いながらぼつりと呟いて、呆れたように応援してい
る面々を見渡す。

すると、新一を囲んでいる生徒が、あ、と声を上げた。

「あれ！あれあれ！灰原さんじゃねえ！？」

生徒が指差した方向を見ると、コートを囲む群衆から少し離れて、
グラウンドに降りる階段に座った女子生徒が見える。

「マジで！？うおー、じゃ絶対勝たねえと！」

再び鳴ったホイッスルに、イトコ見せるぞー！とさっきの何倍も
のやる気を見せる生徒に思わず笑いを漏らしながら、新一はもう一

度階段の方を見る。

(あれは…)

「あ、ホントだ。灰原哀だー」

同じように眼の上を手を翳して階段を見つめた黒羽が、特に驚いた様子もなく呟く。
結構離れた位置にいるが、あの明るい茶髪と白い肌色は確かに昨日ぶつかった少女のものだ。なにより遠目にも感じる彼女独特の雰囲気とかオーラがそれを物語っている。

「…黒羽、知ってんのか？」

「ん？あのこのこと？」

問いかけた新一に、黒羽はきょとんと視線を向けると、まあね、と

あやふやな返答をする。

「さっきのヤツら見てたらわかると思うけど、結構有名だよ、カノジヨ。あれだけ美人だし、頭も学年トップだし。クールビューティーつつつてさ」

「……ふうん、」

やはり皆思うことは同じらしい。どうやらあの灰原と言う少女は万人認める美人だったようだ。

「なんだなんだ？工藤もしかして惚れた？惚れちった？だあめだつてえ、犯罪犯罪！女子高生と教師なんてタブーだかんね！」

「バー口、そんなんじゃねーよ。ただなんつーか、なんかありそーなんだよなーあの子、」

「は？なにそれ？保健医のカン？」

眉をひそめて首を捻る新一に、黒羽が興味深げに詰め寄る。

あの生徒を　灰原哀を見た時から、なにか気になっていた。
黒羽が茶化したような変な意味ではなく、違和感というか、心の奥のセンサーに引っ掛かった感じだ。

「あーでも、それあながち外れてねえかも、」

「え？」

考えるように視線を上向けて言った黒羽に、新一がどっぴろっぴろと目を向ける。

「みちゃったんだよねー俺」

「何を？」

「あの子の、にの腕にさあ、」じじ「」

そう言って、自分のにの腕の、肩に近い辺りから肘に向かって、すうっと人差し指で線を引いてみせる。
新一の眼が、それを辿った。

「でっかい、傷が残ってたの」

ひゅっ、と乾いたホイッスルの音が、空気を裂いた。

t o b e c o n t i n u e d . . .

「あっ…たたた…」

手に持った湯気の立ち上るマグカップを落とさないようにしながら、新一は引きつるような痛みを少しでも和らげようとゆっくりと椅子に腰掛ける。

久々のサッカーは運動不足の身に思った以上の負担を強いたらしく、球技大会が終わらないうちから太ももが筋肉痛を訴えていた。一日中走り回っても平気だった昔を省みてなんだか情けなくなりながらも、まだ筋肉痛がその日の内にくるだけマシかとも思う。これで二日後にこようものなら完全なるご老体だ。着替えた白衣の上から太ももとんと拳で叩いてみる。

開け放した窓から春風が舞い込んで、清潔な色をした真っ白いカーテンを舞い上げる。

一階のグラウンドに面した一番南に位置するこの保健室は、風通しも陽当たりも大変いい。

新一は夕日に染まるグラウンドで片付けをしている生徒を眺めながら、珈琲の入ったマグカップに口をつけた。

「失礼します、」

からからと音を立てて開けられた音に、椅子を回して振り返る。接合部がきゅるりと嫌な音を立てた。

入り口は、入ってすぐの所に布が張られたアルミ製の衝立があるため影しか見えない。

聞いたことがある声だなと頭の隅で思った新一は、衝立の向こうから現れたその人に僅かに目を見開いた。

「え……」

胸の前で、左手首を右手で掴んでこちらを見てきたのは、あの灰原という少女だった。

ゆっくりと無表情で近づいてくる彼女の髪は、夕日のせいで明るい茶色がキラキラしたオレンジに様変わりしている。

それなのにこちらを見つめる瞳だけは、全く染まらずにあの時と同じ緑色を閉じこめていた。

「あー…と、」

思わぬ人物に一瞬頭が混乱する。通常であれば入り口に人を認めた時点でどうしたと質問しているはずなのだが、驚きにそれすらできない。

戸惑う新一を余所に、少女は新一の前までくると、消毒液と絆創膏もらえますかと淡々とした口調で言った。

「へ？あー…怪我か？なら俺が処置するけど、」

背もたれのない回転椅子に座った哀に、にこやかにそう言う。

哀はちらと新一目をやると、いえ、と首を振った。

「慣れてますし、傷口に細かい石が入ってるから…他人にやってもらうより自分で手当てしたほうがいいと思います」

だから結構です、と極めて無感情で言う哀に、内心うわあと思う。

（なんつーか…氣イ強え）

物怖じもにこりともしない彼女に、なるほどこれはクールビューティーだわ、と一人納得する。

仕方なく消毒液や塗り薬など一式用意してやると、少女はどうも小さく頭を下げて右掌にはしゅぱしゅと空気の混ざった音を立てる消毒液を垂らしていく。

掌はちょうど手首の少し上のあたりが裂傷になっていた。

線状の浅い傷がいくつもついていて、皮が捲れて血が滲んでいるのが痛々しい。

しかしながら保健医が怪我の手当てをしている生徒を傍観しているのめいかなものか。やはり自分が手当するともう一度申し出ようかと考えるいると、左手にピンセットを持っていた哀が小さく声を漏らした。

「っ、っ、」

僅かに息を詰めたのを聞いて、ああ、と思い至る。

「貸してみ」

「え？あ、」

新一の声に顔を上げた哀から、半ば奪うようにしてピンセットを取り去る。

目を丸くしている彼女の正面の椅子に座ると、新一はその右手をとった。

脱脂綿を消毒液で湿らせて、傷口を撫でるように拭いてからピンセットで埋まった小さい石を慎重に除けていく。

「ちよ、あの」

「いくら慣れてても怪我してんのが手で、しかも利き手なら不便だろ。左手でやるより俺がやったほうがまだマシだと思っぜ？」

傷口から哀に目を合わせて、にっと笑ってみせる。思った通り、哀はぐっと言葉に詰まった。

怪我のある右手を下から支えるように添えられた新一の左手が気になって落ち着かないのか、居心地悪そうに身じろぎして椅子がきききと軋んだ。

細心の注意を払っているけれど矢張り痛むらしく、傷に触れる度にぴくりと僅かに指が強張って息を呑む。

暫くしてやっと傷口が綺麗になると、塗り薬をつけたガーゼを当てて、包帯をバツの字に巻いた。掌なので絆創膏よりもこちらの方が取れにくいだろう。

終始目を伏せていた哀に気づかれないように、ちらりと腕に目をやる。当たり前だが服の上からだとなにもわからない。それでも黒羽の話が蠕っていた。

「うっし、終わり」

「…どうも」

包帯留めで端を固定して、ぽんと軽く叩くと、哀はぺこりと会釈した。なんとなく照れくさそうな、不貞腐れた顔をしている。

「その怪我、バレーか？」

ふと思いついて訊いてみた新一に、哀は訝しんだ視線を送る。砂が入っていたのだから球技大会での競技で怪我をしたのだろうし、女子の屋外競技はバレーだけだったからと見当をつけての質問だったのだが、ちがったのだろうか。

「…これは」

その時、静かな空間にばたばたと足音が近づいてきた。

扉ががらつと音を立てた後、衝立の横からひよこりと姿を現したのは、よく見知った少女だった。

「しんい、えっと、工藤先生絆創膏くださいー！」

新一を見つけて元気よく言った歩美は、その隣にいる哀を見て、あれっと声を上げる。

「哀ちゃん！教室にいないと思ったら、こんな所にいたんだ！」

哀のそばに駆け寄って、屈託なく笑う。

おや、と思って哀に視線を移すと、彼女は複雑な表情をしていた。どんな顔をしたらいいかわからない、とでも言うような。

「なんだ、お前ら友達なのか？」

新一の問いに、うん、と頷きかけた歩美に重なるようにして哀が

「クラスメイトです」

と言った。

思わずえ？と聞き返す。

歩美は少しだけ困ったような、寂しそうな顔をして、席が隣りなのとぼつりと言った。

はっと思い出したように歩美が哀の包帯が巻かれた手に目を向ける。

「え、もしかして哀ちゃん怪我したの？珍しいね、」

大丈夫？と眼を丸くする歩美に新一は苦笑する。

「誰だつてうつかり怪我することくらいあるさ。いつも冷静でも意外と鈍くさかったりな、」

何の気なしに言ってから哀にじろりと睨まれて、慌てる。
やはり気が強い。

「や、お前のことじゃなくてだな…」

当初の近づき難そうな儂げな雰囲気は何処へ行ったのかと思ひながら否定する。くいつと片眉が上がった。

なんとなくキャラが掴めてきた。かなりの女王様らしい。すると哀がなにごとか呟いた。

誰のせいだと思ってるのよ、と言ったように聞こえる。

「え？なにが？」

「べつに」

僅かに棘のある声色だった。

俺なんかしたかなあ、と考える。

「あ！そうだ哀ちゃん、歩美一日目にアタック決めただけで見てくれた？」

ぱつと表情を変えて話す歩美に、哀は一瞬なにかを言いかけた後また口をとじる。

「残念だけど」

言いながら新一の方に目を合わせる。

「昨日は気分が悪くて、競技中はずっとここで休ませてもらったの。ね、工藤先生？」

すつと細められた緑に見つめられて、思わず傾げようと思っていた首を縦に振ってしまふ。

「そっかあ…それじゃ仕方ないね…」

眉を八の字にして歩美が笑う。

ごめんなさい、と哀が酷く真剣に言うので歩美はいいよと焦ったように首を横に振った。

廊下の方から、歩美を呼ぶ声がした。

「いつけない！待たせてたんだっ！」

あわあわと新一に絆創膏を貰って礼を言つと、背を向けてからもう一度振り返る。

「そっだ！哀ちゃんも一緒に帰ろうよ！」

名案だという顔で問いかける歩美に、哀はやはり首を振る。

「まだ荷物も教室だし、遠慮するわ。また明日会いましょう、吉田さん」

残念そうに、そっか、と呟く。

歩美、と新一が呼び止めた。

「お前がアタックしたのって、何コート？」

「へ？第二コートだけど…どうかしたの？」

「いや、ちよつとな。気を付けて帰れよー」

はいといい返事をしてから、バイバイ先生もさよならと歩美は保健室を出て行った。

沈黙が落ちる。

新一は出口を見たまま、哀は俯いている。

「…言いたいことがあるなら言ったら？」

ぼそりと哀が零す。決まり悪そうに唇を噛んでいる。

「いや？ただオメーがかなりの意地っ張りで素直じゃないってことはわかったな」

にやにや笑いながら、ところで敬語取れてるぜ？というのと、今更でしょとまた睨まれた。

つまりこういうことだ。

昨日歩美が応援に誘ったと言うのがこの灰原哀だったのだ。

そして歩美は第二コートで試合したらしく、そこでのゲームを見たかと歩美が聞いたら、哀は保健室で休んでいたから見ていないと言った。

だがあの日新一が哀とぶつかったのは、確か第二コートだったはずだ。しかも歩美のゲームが終わった直後と思われる。

見に行っていたのだ。

言わずもがなだが保健室で休ませた記憶など無い。照れくさいのかもしれないと勝手に推理する。

「荷物だつて持ってきてんじゃねーか、」

ちらりとカーテンの隙間から見えるベッドの上の通学鞆を見て言つと、哀は表情を変えずに肩をすくめた。

「あら、そうだったかしら？」

「おっまえな……」

しらじらしすぎて、呆れたような乾いた笑いしか出ない。

「…どうして避けるんだよ」

「先生には関係ないでしょう」

そう言われれば問いつめにくい。確かに余計なお節介には違いないのだ。生徒間の人間関係なんて、教師があれこれ干渉したところで結局は個人の問題だ。だからこれは保健医としてではなく、近所のお兄サンとしての干渉だと思っことにする。

（ いやいや、そっちのがアブナいっつーの！ ）

慌てて頭を振る。

「歩美はいい子だぜ？」

「…わかってるわよ、そんなこと」

いらいらとした口調で少女は呟く。
がたりと立ち上がった。

「帰るのか？」

「当たり前でしょ。これ以上貴方と話すことなんてないわ」

「……可愛くねー」

「別に貴方にどう思われようと結構よ」

さらりと微笑さえ浮かべたまま言っただけで、簡易ベッドに置かれた通学鞆を肩に掛ると、出口に歩く。衝立の隣で、足を止めた。

「口裏を合わせてくれたことには、感謝するわ　これでチャラにしてあげる、工藤センセイ」

からから音を立て扉が閉まる。

チャラってなにが、と首を捻りつつ、なんとなく疲れを感じてすっかり温くなった珈琲を一口含むと背もたれに体を預けて目を閉じた。

少女の怪我が自分とぶつかったせいではなかったのだと気が付いたのは、それから随分時間が経ってからのことだった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
...

やれやれ　と若干オヤジ臭く呟いて溜め息を尽きながら、新一は保健室の扉に手をかける。

入る前に、”出張中”と書かれたちやちな造りの円盤状のプレートを回す。穴から見える文字が”保健医在室”に切り替わるのを確認して、がらがらと音を立てて扉を開いた。

ネクタイを中指で引っ掛けて緩めながら、どさりと肘掛け椅子に座り込む。

背もたれに首をだらりと預けて眼を閉じると、溜まったたるさが一層はつきりと感じられた。

遠くに聞こえる音楽の授業の音に、不意に近くからの音が重なった。衣擦れの音。

「……………」

ぱちりと眼だけ開いて、新一はもう一度溜め息を吐く。

緩慢な動作で立ち上がると、真っ白カーテンを払うように開けた。

「
…またか…」

呆れるように零した新一の目線の先には、簡易ベッドがある。
あまり柔らかくなくなさそうな淡い水色の枕には、赤茶が広がっていた。

「おい。起きろよ、灰原、」

少々間延びした声で呼びかける。

紺色のセーラーを身に纏い、猫のように丸まって眠り込んでいた少女
灰原哀は、僅かに呻いて身じろぎした。

「おはよ」

「……………今、何時、」

「さんじにじゅつぶん」

「…貴方なぜここにいるの？」

「こつちの台詞だバーロー」

言いながら、嫌がらせに起き上がったばかりの哀の髪をくしゃくしゃとかき混ぜる。

ヤメテ、と鬱陶しがられたが、別段気にせずベッドを離れ締め切られた窓を開けていく。

新鮮な空気が流れ込んで、独特な消毒液臭さが一瞬春の匂いに変わった。

球技大会の日に一度保健室を訪れてから、哀は度々ここに来るようになっていた。

保健室にサボタージユ目的で来る生徒は何人かいるわけで、本来ならば注意など然るべき処置を取るはずの新一はそれを容認している。と言うのも、教師としてはあるまじき行為だが、新一は五月蠅く言うのが好きではない。

サボりなんて何を言ったところで結局は自己責任だし、小学生ならともかく高校生にでもなれば自分の行動に責任を持つ必要があると、というのが新一の持論だ。

保健室には簡易ベッドが三つ有るし、本当に寝込むほど体調が悪い生徒などは早退させるのでだいたいは空いている。

ベッドに人がいない限り、サボって迷惑がかかるのは誰でもなく本人だけなのだ。

そうでないとき 誰かベッドを使用している場合は新一が仮病を見破り言いくるめて追い払ってしまう。

だから哀がやって来ても歓迎とまではいかないが、まあ取り敢えずと言った感じで黙認してやる。

それに、哀は如何せん仮病とは言えないところがある。

常に貧血気味であるし、ついでに言うと寝不足気味である。保健医には予め健康調査などで体が弱い生徒が知らされているが、示し合わせたところ灰原哀はその中にちゃっかり入っていた。だいたいにして、見るからに華奢で儂げだ。

「お前さあ、ちゃんと食ってるわけ？」

窓枠に寄りかかって、ベッドの上でまだ焦点の合わない眼をした哀を見る。

いつから寝ていたのか、柔らかそうな赤茶の猫毛に、ぴよんと寝癖がついている。

（あ、寝癖じゃなくてさつき俺がくしゃくしゃしたせいか、）

などと考えていると、哀がふわあと欠伸をひとつ。

眠たげで不機嫌そうなその仕草は酷く幼く、うっかり微笑ましく思ってしまった。

「食べてるわ。言っとくけど太らないのは体質よ」

気怠げにベッドの端に腰掛けながらそう言う。

新一が自分の頭を指差して、寝癖、と教えてやると、哀は少し眉を寄せて髪に手をやる。

手櫛で整えるがいまいち的が外れているので、新一までもどかしい気分になった。

「違えよ　こっち、」

近寄って哀の手を取ると、それを髪が飛び出た部分まで誘導する。
一瞬哀が強張った気がしたが、敢えて気づかぬふりをした。

触れられることに慣れていない。

それはこの短い期間で、新一が哀について知り得たことの一つだ。
あるいは優しさや、人の好意にも慣れていないのかもしれない。

心配して哀の様子を見に来る歩美に、彼女はそっけない態度で接するが、実際は戸惑っているだけなのだろうと新一は見当をつけている。

あのふざけた態度の生徒会長曰く、彼女にはクールビューティーやら氷姫やらという徒名がついているらしい。

確かに冷たいとさえ感じる美貌とか、他人を寄せ付けけない雰囲気には相応しい名ではあるが、実は哀なりに色々と考えてはいるらしいか
った。

(不器用なんだよなあ…)

「なんかさあ、」

「…なに」

「お前昔うちで飼ってた猫に似てんだよな」

あからさまにむっとした顔をされた。

「馬鹿にしてるの？」

「あ、いやいや」

深く考えず発した言葉は哀の気に障ったらしく、慌てて弁解する。

「なんつーか、小学生のころ飼ってた猫がいたんだけどよ、そいつがまた全っ然懐かねえの。緑っぱい眼しててさ…あ、テメ。うとうとすんな。聞けつつの」

「…ハイハイ聞いてるってば。それで？」

「そう言う台詞は目を開けてから言え。…まあそれで、つまんねえから諦めて近所の犬を構って遊んでたんだよ。そしたらそいつ、離れたところから恨めしそうにじっとこっち見てんの。今考えると、多分甘え方がわかんなかったんだよなあ。…可愛いやつ、」

ははっと笑いながら言うと、哀がうるんな眼でこっちを見ている。

「な、なんだよ。猫ならいい方だろ。豚やカバってんじゃねえし」

「馬鹿ね、そこじゃないわよ」

教師を馬鹿呼ばわりするとは如何なものか。
なんだか怒っているような口調だ。

(怒ってるつうより …)

「なに照れてんだ？」

「照れてないわよ」

「あ、そ、」

「……………」

「……………」

「……………なによ」

「いえ、別にー？」

惚ける新一に顔をしかめる。

今の話の流れから、新一の言葉がまるで自分に言われた気分になっ
たなんて絶対に言えない、と哀は胸中で思う。

それでもまるでからかうように楽しげな顔でこちらをみている新一に腹が立って、その足を軽く蹴ってやった。すると代わりのようにに新一がベッドに座る哀の頭をぼんぼんと叩いてくる。

「ちょっと」

「んー？」

「私は猫じゃないのだけれど」

「まあまあ、気にしない気にしない」

「セクハラで教育委員会に申告するわよ」

「いや洒落になんないからそれマジで」

ぱつと手を離して諸手を上げる。

今のご時世三秒目を合わせただけでもセクハラになることもあるらしい。若くしてそんなレッテルを貼られるのは御免だ。

くわばらくわばら。

だが彼女の頭を見るとつい撫でたくなってしまう。やはり猫を重ねているのかもしれない。

もう一度撫でようかどうか思索していると、

「失礼します」

礼儀正しい丁寧な挨拶が聞こえて、衝立の向こうから男子生徒が現れた。

「おー。どした？」

返事をしながらベッドのカーテンを閉めて男子生徒の方に向かう。新一が姿を見せると、生徒はどうもと会釈した。

「あ、怪我とかじゃ無いんです。その、生徒会の用事でした。僕、生徒会書記の円谷光彦と言います」

「ああ、黒羽のやつから聞いてるよ。生徒会通信のインタビュー、だっけ？今日だったか」

まあ座れよ、と椅子を勧めてから新一は珈琲を淹れようとコーヒーマーカーに手をかける。

「ええ。いくつか質問させていただいて、写真を撮らせてもらったら帰りますので」

「まあそう堅くなるなって。円谷 より光彦のが呼びやすいな 光彦は珈琲飲めるか？」

「あ、はい。出来ればミルクが貰えると……」

「オーケー　　お前は？」

カップを探しながら、カーテンの向こうに声をかける。

「いつもと同じ。ブラックの濃いやつをお願いするわ」

「かしこまりました」

返ってきた声に、光彦が驚いて背後のベッド側を振り返る。

「え…人がいたんですか。すみません、それならまた日を改めて…」

「あー、いいって。そいつただのサボりだから」

立ち上がりかけた光彦を制して新一が笑う。
シャツとカーテンが開いて、哀がスカートの手折りを正しながら出てきた。

「失礼ね。今は放課後よ、サボりじゃないわ」

「つい十分前まではバリバリ授業だったかな」

呆れたように言ってから再び光彦に向き直った新一は、目を瞬いた。

「光彦？」

少年は哀の方を見て固まっている。かと思うとはっとしたようにあわあわと動揺し始めた。

「は、灰原さん！お久しぶりです！」

「ええ、こうして話すのは確かに久しぶりね。生徒会の仕事、ご苦労様」

どうやら知り合いらしい。

わかっていない新一を見かねて、一年のときクラスが一緒だったのと哀が言った。

(なるほど…?)

極めて淡々と話す哀と、一杯一杯に応えている光彦を見て、新一は頷く。

知らず知らず口元が緩んでいたらしく、気づいた哀が片眉を上げてなんなのと問うてきた。

「ウン、あれだよな、」

「どれよ」

「青春だなあって思って」

「…貴方本当に二十代？」

光彦だけが、ぽかんとした顔をしていた。

「えっと、それじゃあこれから十の質問をしますので答えてくださいね」

「おう」

写真撮影を済ませて、椅子に座って珈琲を啜りながら光彦に向き合う。

哀はやはりベッドに腰掛けて足をぶらぶらとさせていた。

「ではまず、名前と年齢をお願いします」

「工藤新一、二十四才」

「好きな食べ物と嫌いな食べ物は？」

「あー基本なんでも食う。けどレーズンだけはぜってえ無理」

「あら、じゃあ今度は是非レーズンパンを差し入れたいわね」

くすりと笑って哀が言うので、はははと爽やかな笑みを返してやった。少しひきつった感は否めない。

「恋人または配偶者はいますか？」

「俺ア独身。恋人は募集中」

「まあ、寂しい、」

楽しそうに哀が茶々を入れてくるので、新一は軽く睨んでみたがまったく効力はなかった。

「好きな異性のタイプは？」

「あー…優しくて家庭的、とか？」

「ありきたりね」

「いいだろ別に。無難に答えてんだよ、無難に」

「興味ないわ」

「待てコラ」

咳払いされて、漸く光彦を思い出して一旦休戦する。

その後も趣味とか特技とか、それこそありきたりな質問をされて、最後に生徒へのメッセージを述べると、光彦はパターンとメモをしていたノートを閉じた。

「終了です。ご協力有難うございました」

「いや。お前も大変だな」

立ち上がってぺこりとお辞儀した光彦に、新一も苦笑する。すると哀が、ねえと声をかけた。

「質問、九つしか無いわよ」

「え？」

指を折りながら言う哀に、そんなはずはと光彦がノートを開いて数える。あ、と声を漏らした。

「すみません、三つ目をとばしてました！」

「ああ、いって。で？どんな質問だ？答えるぜ」

えっと確か…、と光彦がぺらりとノートを捲る。

「好きな動物はなんですか？」

訊かれて少し考える。

視界の端にベッドでふわあと欠伸をこぼしている横顔を見て、新一は何気なしに答えた。

「
猫」

ゆったりとした欠伸を止めて、振り向く面食らった顔に、悪戯っぱくにっとなんて笑ってやる。

一度何か言おうと口を開いて、でも噤んで、余所を向いてしまった。

今度こそ誤魔化しようがなく、照れているらしい。

t o b e c o n t i n u e d . . .

若き保健医は只今絶賛気まずい状態におかれている。

「あー…ですから、」

くすくすと、あちこちから笑いが漏れている。
なんか左下からの校長及び教頭の視線が痛い。いたたまれなくなりながらも、なんとか最後までやり遂げねばと、新一はめげずに続ける。

(あ、ヤバイ)

「みなさん、も、体調管理に、気をつけてくらさ　う、」

定例の全校集会　ここ最近風と、時期外れにインフルエンザが流行っているらしく、保健医の新一は予防の呼び掛けと発症した際の対処法を舞台上のマイクから伝えている。

（せほいせほいせほい）

「 八、」

次の瞬間、新一を除く体育館にいた全員が、耳を塞いだ。
キーン、とスピーカーから耳障りなノイズが響く。

「 ……く」

やっちまった、と思いながら、その場を繕うべく半ばやけくそで口を開く。

「くれぐれもこつはならないように」…」

「だははははは！ホンマ自分笑かすわ…っ！くく…っ、はつくしよーん！やて…っ　ほぶッ！」

昼休みの保健室、新一の目の前にはひいひい言いながら抱腹絶倒している体育教師がいる。
目に涙を浮かべてベッドの枕をばふばふしつつ笑い転げる男をぎろりと睨みつけて、新一は近場にあった別の枕をその顔面に思い切りお見舞いしてやった。

「だあああうつせー！いい加減笑い止めっつーの！オメーに俺の気持ちがかんのか。だいたい朝から鼻水鼻詰まり喉ガラガラだっつーんだよ！誰も代わってくれねえし！」

全く朝から散々だった。

集会で話すのを二つ返事で了解したのは良かったが、当日のコンディションは最悪だ。

どうみても、百歩譲っても風邪気味だろアンの状態の保健医に体調管理云々の注意を受けてもという感じで生徒はくすくす笑いながら聞いているし、しかも全生徒全教職員の聞くスピーカーであろうことか思い切り、それはもう盛大なくしゃみをかましてしまった。生徒は大爆笑で、次の教頭からの連絡事項なんてほぼ聞いていなかった。

校長や教頭からは示しがないと白い目で見られるし。

俺は断じて悪くない、悪いのはこの風邪菌だと新一は心の中で呟く。

「いやあ、やからって最後のあのセリフはあかんやろ。『くれぐれもこうはならないように』って。完璧ネタや、俺がどれだけ舞台上がってツッコもう思たか！」

関西人の血が騒ぐわあ、とか未だに笑っている。

「そーかよそりや上がって来なくて良かったぜ。あー…もう最悪ら…黒羽とか脇で集会中ずつと爆笑しやがって…！あいつぜってえからかいにくる！二週間はこのネタで絡んでくる！」

「まあアイツは工藤からかうことを生きがいにしてるよーなもんやからなあ。それにしても自分大丈夫か？ごつつ鼻声やぞ」

ずび、と鼻を嚙ってからおもむろに新一はティッシュを取って鼻を

噛む。

「あー多分鼻風邪ら。どっつてことねー」

くしゅん、とくしゃみする。

「ホンマかいな…。ちゅーかマスクせい。うつるやないかい」

「じゃあ体育教官室戻れよ…。ま、安心しろお前は大丈夫ら」

「は？なんでや？」

ティッシュを取って、ちーんと鼻をかむ。

「馬鹿らから」

（あー…頭痛え…）

五、六限目、職員室で書類等の仕事を済ませて保健室に戻る頃には、症状は更に悪化していた。

鼻づまりは酷いし、喉も腫れているし、頭痛がする。

もう放課後だし今日は少し早めに帰るか、保健室の扉をがらがらと横に滑らすと。

「お！呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン！出たな、ハクシヨ
ン大先生！」

「……………」

がらびしゃんと無言で扉を閉める。見なかったことにしよう。

この体調であるテンションを相手したくない。いやいつだってできれば相手したくないテンションの持ち主だが。

その願い叶わず扉は向こう側から直ぐに開かれた。

「ちよつとちよつとーそれが心配してお見舞いに来た生徒に対する
態度なわけ？」

「オメーに本当に俺を見舞う気があるなら今すぐその口を閉じて速
やかに帰宅してくれ黒羽」

がくりとうなだれるとにやにやと笑っている黒羽に促され結局部屋に入った。

「まあまあ。本当に心配してたんだぜ？俺らなら体調悪くなったら保健室いきゃいいけどさ。保健医が体調悪くなったら看病してくれるやついないわけじゃん？　ね、哀ちゃん？」

にっこり笑って後ろを向いた黒羽の言葉に、目を丸くする。

「え、なんでお前までいんの？」

「随分なお言葉ね？」

きよとんとした新一に、哀が馬鹿にしたように笑う。

確かに保健室にはどの生徒も来る権利があるわけだし、なんているなどと言う聞き方は不適切である。この場合新一が聞いたかったのは、『なんで黒羽と一緒に灰原がいんの？』ということである。哀もそれをわかった上での返答なのだ。

「いやね？今をときめくハクシヨン大魔王に会いに来てみたら噂の灰原サンが先客してたからお話してたわけよ！哀ちゃんも心配だったんだよねー？」

「馬鹿ね、そんなんじゃないわ。此処なら珈琲も無料だし、いい寝床もあって静かだから暇つぶしに来てるってだけよ。今に始まったことじゃないもの」

「いやいや。わかってたけど。オメーもうちよい嘘でもいいから本音隠せよ」

デスク上にあるティッシュで鼻をかみ些かましになった声でげんなりと新一が言つと、哀は肩を竦めた。

「わかってないねー工藤は！」

「あ？」

やれやれと首を振る仕草に、痛む頭を押さえながら聞き返す。

「そこが哀ちゃんのいいところなんじゃん。カワイイ顔して齒に衣きせず思つたことははつきり言つ。ギャップギャップ！」

ねー、と哀を覗き込んでにこにこ笑う。ハイハイと哀は対して興味なさげに返した。

どうやら新一の知らぬ間にこの二人は随分仲良くなったらしかった。殆ど“素”で接している哀を見て、新一は僅かに驚いていた。相手にしないときはとことん一線を引く人なのだ。

変わらず熱っぽい頭でやりとりをぼんやり見ていると、不意に黒羽が哀の頭を伸ばした。

一瞬やはり小さくびくりと強張った体は、予想に反してゆるゆると弛緩するとわしゃわしゃとそのまま撫でられた。

「黒羽、」

ぐいっと体を後ろへ引かれて、黒羽は手を放していた。よろけた体を立て直して、アブねえ、と振り返って言おうとしたのを飲み込んだ。

「……セクハラだぜ」

学ランの襟の後ろを掴まれたまま、背後から引つ張った保健医と目を合わせる。

なんだかまるで取って付けたように聞こえたのは、微妙な間のせい

かもしれない。

言った本人が、行動してからなんと言おうか迷ったような素振りを見せていた。

鼻声のせいかな、その声はいつもより低く感じられる。

普段の悪ふざけを呆れたように諭す時との僅かなニュアンスの違いを、黒羽は敏感に感じ取っていた。

これは失敬、と諸手を上げて懇懃に言うと、首元を引っ張る力はあっさりとした緩んだ　かに思えた。

「ぐえ、」

さっきとは桁違いに強い　と言うより重い力をかけられて、黒羽は潰れた声を発して再び後ろによるめいた。

「わわわ！」

つんのめりながらも後ろにかかる負荷を無くそうと、引っ張る新一

の体を肘掛け椅子めがけて落とす。
がたと音をたてて、新一は椅子に崩れ込んだ。

「工藤先生？」

ぐったりした新一に、異変を感じて哀が緊張を含んだ声で問いかける。

ずり落ちかけた体を黒羽が慌てて抱き起こすと、新一は赤い顔で息を荒げていた。

目を見開いて哀が額に手を当てる。

「…黒羽先輩、この人をベッドに寝かせるの手伝って」

馬鹿ね凄い熱よと、哀が言ったのを、新一は遠くに聞いた。

t o b e c o n t i n u e d . . .

「 ……四十度」

ピピ、という電子音に半ば無理やり体温計を抜き取ると、それが指す数値はやはり標準よりも高いものだった。白衣を脱がされベッドへと横たえられた新一は苦しげに歪めた表情で、荒い息をあげている。

「どうしてこんなになるまで我慢してたの。保健医なんだから自分の体調くらいわかるでしょうに」

ゆっくりと持ち上げた新一の頭の下に氷枕を差し入れながら、哀はため息混じりにそう言った。

「んー…一応市販の薬は持ってきてたんだな…封は開けてねえみてえだけど」

「どうせ忘れてたんでしょ、」

デスク横の新一の荷物の中にカプセルの絵がプリントされた箱を見つけて黒羽が言ったのに、新一に布団を被せながら哀が淡々と返した。

確かにそうだ。朝のぶんは催眠作用があるので遠慮した。昼からはきっちり服用しようと思参したのに、なんやかんやとやっているうちにすっかり頭から抜け落ちていたのだ。

目を閉じて、ぼんやりとした意識で言い訳する気力も起きないまま思い出す。

「熱が高すぎるわ。取り敢えず解熱剤を飲ませましょう。黒羽先輩は…だれか　そうね、服部先生あたりにでも車出して貰えるか頼んできてもらえないかしら」

「おっけ！」

敬礼して見せて、黒羽が保健室から出て行く。

静けさを取り戻した空間に新一の息遣いだけが響いている。随分と外が暗くなっていることに、哀は初めて気が付いた。

水と一緒に薬を飲ませる。

額にかかる前髪をそっと取り払って、棚から勝手に取り出した冷却シートをペタリと貼り付ける。ん、と気持ちよさそうに新一は声を漏らすとうつすらと目を開けた。

「はい、ばら…」

なんですか、と哀はベッドの傍らに座って熱で潤んだ新一の目を見返した。

ゆらゆらと覚束ない視線で、新一は布団から右手を出すと、ふっと持ち上げた。

「…なに？」

まさか心細いから握ってくれなんて言うんじゃないでしょうねと、先手を打つべく哀が片眉を上げると、新一は違えよ、と僅かに拗ねたように言った。

そうして、ぐっと手を伸ばすと、なかなか強引にくしゃくしゃと哀の頭を撫でた。

髪を乱されながら、一瞬哀はきよんとする。しかしすぐに顔をしかめると、ちよっと、と抗議の声を上げた。

「…セクハラなんじゃなかったかしら」

「……これは違う」

「貴方さつき黒羽会長に言ってたじゃない。どうして黒羽先輩がいけなくて貴方がいいのよ」

「俺の専売特許だろ」

「…なに、それ」

意味が分からないんだけど、と頭に手を置かれたまま、哀が憮然として言った。

「…… お前ってさ、触られんの嫌いだろ」

「 だったらなに」

そう思うならいい加減放してくれない、と不機嫌な声があった。

「なんで黒羽を拒まなかった？」

じっと見つめたまま、どことなく責めるように聞かれて、哀は思わず、え、と聞き返した。

「お前、何か理由がない限り、ちよつとでも他人に触らせたりしねえだろうが。なのに、なんで普通に撫でられてんだよ」

「ちよ、…なに言いだすの。そんなの、別に…深い意味なんてないわ」

なんだかいつもの保健医らしくない発言に、哀はたじろいだ。

「だいたい、そんなこと言ったら、貴方だって私の意志に関係なく頭撫でてくるじゃない。だからいちいち拒むのが面倒になっただけよ。ただそれだけで」

「嘘、」

割り込むように新一が言った。な、と哀は口を嚙む。

くしゃりと柔らかい赤茶を指に絡めるように横髪を撫でて、
と新一はもう一度言った。　　嘘だね、

「俺に撫でられんの、好きなくせに」

「　　っ！」

「あ、哀ちゃん。服部連れてきた　　」

「私、帰るわ」

「へ？」

がらりとタイミングよく向こうから開いた扉に、黒羽と服部はおや、と出てきた少女を見る。

しかし立ち止まらずそのまますり抜けるように廊下を早足で歩いていく哀にポカンと口を開けた。

「え、哀ちゃん？えー？あー…バイバーイ」

「…なんや？用事でもあつたんやろか」

曲がり角に消えた背中にひらひらと手を振る黒羽の横で服部が首を捻る。

「なあ…なんか、顔赤くなかった？」

「そか？」

うわあ、ぐったりしてるやん大丈夫かいな死ぬなや工藤ー！と保健室に入ってベッドを見るなり言った服部をよそに、黒羽は窓の向こうの薄暗くなったグラウンドに目を向ける。

校舎を出て校門に向かって足早に歩く小さな影を、室内を映し出したガラス越しに視線で追っていた。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d...

街灯が灯った道を家へと歩きながら、哀は頬に手を当てた。

いつもは冷たいそこはほんのり熱を残していて、早足だった歩調をだんだんと緩めて立ち止まると、哀ははあと溜め息を吐いた。

「なんなの、」

きゅっと眉根を寄せて、ぽつりと呟く。

(なんなのよ、あれ)

そつと髪に触れ、くしゃりと押さえてみる。まだあの時の声が、視線が、頭から離れなくて胸がざわついた。

『俺に撫でられんの、好きなくせに』

熱混じりの吐息と少し掠れた声、そして不適な笑み。
射抜くような瞳に、本気で火傷するかと思ったのだ。

信じられない、と哀は思う。

あの自信は一体どこから湧くのだろうか。

だいたいにしてあの保健医は普段から 無意識か意図的かは別としても 気障で自信過剰なきらいがある。きっと今までもあの調子で世の女性を数多泣かせてきたに違いない。

そもそも話題が可笑しかったのだ。

頭を撫でるだの撫でさせないだのと、そんなのは哀の知ったことではない。

いつも気まぐれに髪をくしゃくしゃにしていくのはあちらが勝手にしてくるのだ 哀の意志関係なく。

それなのに今更哀が拒む云々と指摘される筋合いはないだろう。

(そつよ)

ひとりで納得しながら、哀は小さく憤った。

なんの変哲もない住宅地で、些か異彩ともいえるモダンデザインの家の門を潜る。
緩やかなカーブのかかった窓から明かりが漏れていて、哀に家主が一足先に帰宅していることを告げた。

「おかえり、哀くん」

玄関で靴を脱いだところで、穏やかな声がかけて哀は顔を上げた。

「…ただいま、博士」

まだぎこちない口調で言って、哀は小さく微笑んだ。

この家に来てはじめて知った言葉だったから、なんとなく言い慣れないのだ。

それでもこの優しい老父が教えてくれたことは、たとえ不格好にし

かできなくても身につけようと哀は決めていた。

博士、というのは初めて彼 阿笠に逢った時にそう呼んでくれと彼の方から申し出てきた呼称だった。

君もこんなじいさんをお父さんなどと呼べんだろつ、近所の子ども達もみんなそう呼ぶからそれで構わないよと、顔をくしゃりと崩して笑ったのを覚えている。

実際科学者らしく、時折地下の作業室でなにやらヘンテコな発明品を生み出している。

ぐっ、とくぐもった音が鳴った。阿笠はずいぶんと丸みを帯びた腹を撫でさすって恥ずかしそうに笑った。

73

「遅くなってしまってごめんなさい。ご飯にしましょう」

まるで太陽みたいに無償の暖かさを注ぐ同居人に優しい眼差しを向けて、哀は言う。

「そうじゃのう。お腹ペコペコじゃー」

快活にそう言うと、不意に手を伸ばして大きな掌で哀の頭をぼんぼんと叩いた。

満足げに鼻歌を歌いながらキツチンへと歩いていく背中を見ながら、哀はじわりと温かくなる感覚を噛み締める。

こんなふうに阿笠に触れられても平気になるまでには、随分と時間がかかった。

未だに僅かに緊張するものの、それでも最初に比べたら信じられないほどの進歩だ。

そこまで考えて、はっとした。

「あ、ね、」

そうだ。

そうなのだ。自分は簡単に触れさせたりしない。それこそ野良猫のように他人を警戒し、なれ合つのを拒むのではなかったか。

『お前ってさ、触られんの嫌いだろ』

嫌いだ。

たとえば混み合った電車やバスなどやむを得ない場合でも、ともすれば鳥肌が立つほどに。

だからといって保健医に大人しく撫でられていたのはそうされるのが好きだからかと聞かれれば、それは短絡的過ぎると思う。ただ単に頻度の多さに妥協して不本意にも慣れてしまったのだと思いたいが。

「 最悪、 」

(嫌なことに、気づいてしまった)

保健医の言うとおり、黒羽に触れたことは哀の行動規則に外れている。
あの自信過剰教師がそれを見透かしていただけでも腹が立つのに、なぜあのひょうきんな生徒会長を拒否しなかったか、その理由に思い至ってしまった。

答えは簡単だった。

あまりにも似ていたからだ。

既に無意識に気を許してしまった、あの腹立たしい風邪っぴきに。

t o b e c o n t i n u e d . . .

8 (前書き)

7と8の話はサイトのほうに置いてあります。
風邪ひき工藤を送る男どもの話です。

いくら此処が私立で、しかも雇い主が昔からの知り合いだからって、教師がそうそう休んでいられない。

代用の教師がクラスに行くと言っても授業を進めるには限界があるし、何より自分の受け持つ授業は自分のペースとプランで行いたい。

そんなこんなで、先日学校にて風邪をこじらせぶっ倒れるという保健医としてあるまじき失態を繰り広げた新一は、土日を挟んで気合いで熱を下げ、未だにずるずると残る鼻づまりや咳を薬で無理やり抑えると今日も朝早く出勤してきたわけである。

「はよークドセン」

「おはよーございまーす」

追い越しざまに生徒が次々と挨拶してくれる。教師になって良かったなあと思うのはこういう何気ない瞬間だ。

風邪治ったのー？というのに混じって、「あ、ハクション大魔王だ」という声がちよくちよく聞こえた。誰が広めたかなんて考えずともわかった。

（あんの黒バカ後で覚えてろ…！）

まあそれにしたってあの日服部に付き合っただけで家まで運んでくれたのだ。少しは手加減してやらなくもない、と新一はひとり考えながら保健室へと向かう。

扉を開けるとふわりと消毒液の香りがして、ついでに新一は大きくくしゃみをした。

「お…っ？」

白衣のポケットから出して上げかけた左手は、上げきることなく中途半端な位置で止まった。立ち止まった新一の目の前の廊下を曲がって去っていった背中を引きつった顔で眺めると、溜め息を吐く。左手をそのまま頭にやるとがしがしと掻き乱した。

（おいおいまたかよ、）

このシチュエーションは本日三回目だ。既視感さえ覚える。

なんだかんだ言いつつ保健室常連の哀は生徒の中でもよく話す、というか仲のいい（と言うと本人はそれはもう嫌な顔で否定しそうだが）ほうで、学校内で見かければ声を掛けるし、哀のほうも必要以上にはしないし多少嫌な顔はするものの言葉を返してくれる。それなのに、今日は一度も捕まらない。明らかに目が合ったのに、新一が話しかけようとする素振りを見せているのに、その前にふいと踵を返して消えてしまうのだ。

「…あー…」

これは、もしかしくとも。

「…避けられてる？」

誰に？とベッドに腰掛けあんパンにかぶりつきながら、不明瞭な発音で黒羽はきょんとした。

「灰原に」

こちらはこちらで新一は窓際に体を預け、三分経ったカップラーメンを箸で混ぜ返しながらローテンションで答える。

「ずず、といい音をたてて麺を嚼ると、やっぱりシーフードだなとしみじみと頷いている。」

「へー…哀チャンがねえ… なんかしたんじゃねえの、工藤が」

「なんだか途端にどうでもよさそうな口調になった黒羽に、別のベッドに腰掛けた服部がカップ焼きそばにソースを絡めながら、ひゃあやらしいセクハラ教師」とにやにやしながら口添えする。

「誰がセクハラ教師だ！つかオメー焼きそばソースでシート汚したら弁償だかな」

「シートの一枚や二枚ケケケチすなや。そない小うるさいから灰原に愛想尽かされてんとちやうか？」

ふふんと笑って服部が言う。

「だいたいやなー、自分俺にそないなことを言うてかまへんのか？あーあ、自宅まで送り届けて粥まで作ったのに、俺ってホンマ可

哀相なやつぢやなあ」

「だよなー。途中コンビニでハーゲンダッツのアイスまで買ってあげたっつーのに」

「いやソレ俺食ってねえし。オメーが食いたかったただけだろうが黒羽」

しかも俺の金使ったろ、と睨む。
ケチケチすんなって、と黒羽がにっこり笑うので新一は足を伸ばして軽く蹴りを入れてやった。

「しかし本当になんかしたかねー俺？正直よー、あん時熱に浮かされててあんま記憶ねんだわ」

眉間に皺を寄せてうつんと唸る。ないと信じたいがほぼ意識がなかったので服部の言うようなことも強ち冗談とは言えない。

「あ、そや 確かあん時灰原エライ勢いで出てきたなあ。な、黒羽？」

「あー…うん。そうだったかもね」

「え」

焦る新一を見て服部がにやりと嫌な笑みを浮かべる。

「まさか…ぼうつとしてチューでもしてもうたんちやうか？」

「な…！」

「それはないでしょ」

割り箸で新一を指していた服部と、そんなわけねえだろと言おうとして窓から体を離れた新一は思わず黒羽の方に視線を向けた。

えらく無感情な声だった。普段の軽いトーンとあまりに違いすぎて、驚いたのだ。

瞬きしたときにはいつも通りの快活な高校生に戻っていた。或いは幻覚かと思うほどに。

「流石に工藤もそこまで墜ちてないっしょ。哀ちゃんだってそんな油断する子じゃないだろうし」

「…せ、せやな。いくら工藤がダメな大人でも流石にな、」

「…俺がダメな大人ならオメーはダメな人間だかな」

「なんやとー、と服部が喚いたが新一は涼しい顔をしてあしらった。

「ていうかさー」

そんな二人を小学生の喧嘩を見るように眺めていた黒羽は、食べきったあんパンの袋をくしゃっと握り潰して言う。

「なんで工藤そんな気にするわけ？ そんなのただの偶然かもじゃん。もともと哀ちゃんってそんな人付き合い得意な方じゃないみたいだし？」

握った左拳にビニールの袋をきゅきゅと押し込みながらちらりと新一を見るので、一瞬言葉に詰まった。

「そ、りゃ…まあ。なんつーか、懐いてた野良猫が突然よそよそしくなった心境…みたいなの？」

「…あ、そ」

胡散臭そうに呟いて、黒羽は左拳を右手の人差し指でトントンと叩いた。

ぱ、と拳を開くと、握られていたはずの手のひらには何もなかった。

「 灰原、」

背中に掛けられた聞き慣れた声に、思わずびくりとしてしまう。捕まらないように不自然なほど足早に去ろうとして、肩を掴まれた。

「なーんつつて。騙された？」

はっとして振り返ると、そこにはよく似た　しかし予想したのとは全く違う顔があった。悪戯っぽく笑っている。

「…随分と悪趣味ね、会長さん？」

片眉を上げて睨まれて、黒羽は両手を上げてみせる。

「いやあ、手っ取り早く真偽を確かめようかと」

「あら、それで？」

「うーん…どうやら工藤の言ったことはホントらしいね」

「…そう、良かったわね」

注意深く哀の表情を読み取りながら会話していたが、黒羽はふう、

と溜め息を吐いた。

「つれないなあ。なんて言ってたの、とか聞かないんだ？」

「大体予想できるもの。興味もないし」

なるほど、と肩をすくめて黒羽は笑みを零した。

(面白いなあ、)

本当に、この少女と話すのは面白い。

世の女の子は万遍なく等しく愛しているし、先輩、会長、と慕ってくる子なんかはやっぱり可愛いと思う。

だけど哀ほど関心をもった相手はいないのではないだろうか。

頭の回転が早い人間との会話は好きだ。人付き合いの広い黒羽だが、深く付き合う人間はそういう意味で選り好みしている。

不本意だがあのエセ保健医なんかはいい例だ。

ただ、勉強できるのと賢いのは違う。いくら成績がよくてもつまらないやつなんてごろごろしているのだ。

その点で、哀は黒羽にしては珍しく女の子で興味を引かれる存在だった。

そしてそれを差し引いても、自分は目の前の少女に酷く、惹かれて
いる。

壊れてしまいそうに儂いのに、曲がらない強い眼差しをしている、この少女に、いつからか。

吸い込まれそうな輝きを湛えた、綺麗な緑色の瞳を見つめていると、その眼は怪訝な様子を浮かべ見返してくる。

「黒羽先輩？」

首を傾げた哀の動き合わせて、赤茶の柔らかそうな髪がふわりと揺れた。

（　　）　　いいなあ、（　　）

次の瞬間、哀は両手をがしっと掴まれ、引き寄せられた。自然と傾いた体に足が前に出る。

必然的に二人の距離が狭まった。

放課後直ぐの教室前廊下、帰宅途中や部活に向かう生徒たちが、ざわざわと振り返る。

自分の鼻の先に、すっと通った鼻筋と、あの保健医よりも僅かに丸

っこい青みがかった瞳があつて、息を飲む。

「ちよ、

」

「俺さ、好きになつたかも。哀ちゃんの」ト

よく似た顔が、もう一人なら絶対にしないだろう甘い笑みを浮かべて、囁いた。

t o b e c o n t i n u e d . . .

教室中が眠気で気だるい雰囲気に満ちる最たる時間は、教師のつらつらとした一定の声のトーンと、胃に血液が持っていていかれるせいで頭がぼうつとする午後一番の古典であると確信できるが、それにしただって昼食前の数学も生徒にとっては耐え難い時間に変わりない。だからスピーカーから流れるチャイムの音で、さながら牢獄から解放された囚人のごとくみな一斉に動き出した。

吉田歩美もその一人だ。

いそいそと鞆から弁当を取り出すと、窓際最後列に座る少女の元へと向かう。

「あーいーちゃん！お昼食べよう！」

元気よくそう言うのと、目的の少女　哀の前の、既に主のいない席に座る。

教科書類を片付けていた哀は歩美の声に顔を上げた。

何度一人で食べたいと言っても、この少女は自分を誘うのだ。ひとりで食べるなんて寂しいよ、と。

小さく苦笑して、哀も弁当を机に置いた。

「…ええ、吉田さ」

言い切る前に、教室の扉がガラツと勢いよく開けられ承諾の言葉は遮られる。強い力で叩きつけられた扉の音に、授業の延長線上で寝ていた男子生徒がびくりと飛び起きた。

お邪魔しまあす、とやたら明るい声が聞こえて、哀はびくりと片眉を上げた。

きゃあきゃあというクラスメイトの女子の声が飛び交う。

「いたいた！あーいちゃん、」

哀の姿を認めるとぱっと顔を輝かせ、会長だ先輩だと騒ぐ周りに愛想を振りまきながら現れたのは 我等が生徒会長様である。

「お昼一緒に食べよう」

主人に駆け寄る忠犬宜しく、にこにこ嬉しそうに哀達のもとへやって来る。

うわあ、と思いつつながら窺うようにちらりと歩美が隣に視線を向けると、哀は眉間を押さえて深い それはもう深い溜め息を吐いて

いた。

見渡さずとも、周りが興味津々で事の行き先を見守っているのが分かる。

この光景　生徒会長が下級生の女子、それも噂のクールビューティーをランチに誘いに教室へ通っている　が見られるようになってからまだ三日しか経っていなかったが、既にその事實は学校中に広まっていた。

尤も、噂の元凶である黒羽本人が隠しも否定もせず、むしろ周りが騒ぐのを歓迎しているふしが有るのだから当然だ。

そんなこんなで哀のクラスメイトもはや常連と化した黒羽を快く迎え入れ、哀の反応を面白半分に観察しているのである。

「…いい加減にしないとストーカーで訴えますよ、黒羽先輩」

「やだなあ、ストーカーなんて人聞きが悪い。学年も部活も違う好きな子と、ちょっとでもいいから一緒にいたいって思っるのはそんなに悪いこと？」

にこりと笑いながら、臆面もなくそんな台詞を言ったのければ、周りに小さく黄色い声上がる。

「…いったいどうしたらそんな胡散臭いことばかり口にできるのかしら。昼食を摂る前に砂を吐きそうだわ」

「つれないなあ、哀ちゃんってば、」

これ見よがしに溜め息を吐く黒羽に、哀はほつといて食べましよう吉田さんと歩美に声を掛ける。

「う、うん」と歩美はぎこちなく頷いた。日頃めげずに誘った甲斐あつて、哀にしては珍しくすんなり昼食を一緒にするのを了承してくれたのだ。

生徒会長には悪いがここは譲れない、と歩美は広げかけていた弁当に再び手をかけた。

黒羽はお構い無しに、近場の椅子を引つ張つてくると二人の相中の位置に座り込む。

哀はちつとも嬉しくなさそうにちらりと目を遣ったが、なにも言わなかった。

言っても無駄だから、疲れることはしまいと決めたらしい。

これがここ数日お決まりの光景だった。

がらりと扉を開けて普通に足を踏み入れ掛けて、新一は動きを止めて目を丸くした。

「え。なんでお前ここにいんの？」

「……貴方私がこの生徒って知ってる？」

いつぞやと同じような言葉を思わず漏らした新一に、本来彼の定位置である肘掛け椅子に座った哀が不機嫌そうにそう返す。

「あー…や、そうじゃなくてよ、」

確かに生徒なんだから保健室にいてもなんら不思議ではないのだが、そういうことではなく。

「…避けるのはもう終わりか？」

「…もうちょっと言い方つてもんがあるんじゃないかしら」

なんと言葉にしていいか分からず結局ストレートに訊いてしまった新一に、哀が呆れたように言う。避けていたことは認めるらしい。なにか深刻な理由があったのかもしれないのだから、普通ならわざわざ掘り返すのも躊躇われるところだろうに、この保健医はどうしたものだろつかと哀は変なところで心配になった。

「…うつせえな。しょうがねえだろ、思いつかなかつたんだから！
で…、俺なんかしたかよ？」

ふと難しい顔をして、新一は聞く。実を言うと先日服部に言われたことを気にしていたのだが、それを哀が知る由もない。

一方、哀は真剣な新一に少し面食らったようだった。

「…別に」

「別について、お前なあ」

(こっちは服部の言うことを真に受けて結構真剣に心配したっつもの熱に浮かされなにかとんでもないことをしたのではないかと新一なりに悩んだりしていたのだ。別に、と言われて肩透かしを食らった。

「じゃあ避けるのやめたのは？」

「…別に」

「…おーまーえーは！」

眉を潜めてぼつりという哀に、新一の顔は引きつった。しかし直ぐにはあ、と嘆息して体の力を抜くと、しょうがなさそうに笑った。

「…ったく。こう見えて結構傷ついたんだからな」

「え？」

「寂しいだろー、避けられるなんて」

「…そうね。もうしないわ…多分」

「多分かよ」

溜め息混じりに笑いながら、白衣のポケットに入れていた手をごく自然な動作で哀に伸ばす。

「ストップ」

当たり前のように赤茶の髪を撫でようとしたその手を、頭の上ではつとしたように哀が止める。
はし、と自分の手を止めた白い両手を見て、ああ小さいなと新一は思った。

「言っておくけど、」

睨むようなしかめられた顔に、撫でるなどと言われるのかと思う。

「貴方の言ってたことは、全くの見当違いよ。私は不本意なのだ
覚えておいて」

それだけ言うと、両手をぱっとはなす。
必然的に落ちた新一の手が、ぼすつと柔らかな猫毛に触れた。

「…なんのことだ？」

きょとんとしながら、取り敢えず拒否されたわけでないようだ
と判断してくしゃくしゃと掻き回す。

満足げに手を離れた新一を睨んで、乱れた髪を整える。

「…俺に撫でられるの好きなくせにって言ったのはどこの誰だった
かしら」

ぽつりと哀が呟いた。

「あ？なんて？」

熱に浮かされて言ったことだったとは言え、やはり覚えてないらしい。

聞き取れずに訝しげな表情をした新一になんとか酷く腹が立って、
哀は嫌味っぽく、別に、と誤魔化した。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

「うおつと、」

放課後の廊下、ちょうど曲がり角で予期せず訪れた衝撃に新一は声を上げた。

ばさばさという音に目を向けると、いつぞやの男子生徒 円谷光彦がよろめいた体勢を立て直しているところだった。

「悪い、大丈夫か？」

ぶつかった拍子に持っていた書類をぶちまけてしまったらしく、足元には何枚ものプリントが散らばっている。

「あ、はい。こちらこそすみません」

相変わらず今時珍しいほどに礼儀正しく頭を下げるとかがんで書類を拾い始める。

ちょうど下校する生徒に挨拶を返した直後だったせいでこちらも明らかに不注意だったこともあるので、いいと断る光彦を笑って制すと新一も一緒になって書類を集め始めた。

「お前いつも仕事熱心だなあ……」

手に取るプリントが全て生徒会が発行する配布物であるのに気付いて、しみじみと新一が言う。

光彦のことは校内もよく見かけるが、昼休みでさえも生徒会室に入りしているようだった。

「今の時期は思ったより仕事が多くて…僕は特にペースが遅いので人一倍やらないととても回らないんです」

拾いきった書類を受け取ってありがとっございませす、とまたぺこりと頭を下げる。

「へえ…偉いなあ、お前。どっかのチャランポラン会長なんか、俺はただの一回も真面目に働いてるところ見た事ねえけどな」

へっと皮肉ったらしく笑いながら言つと、光彦は言外に示す言葉に思い至つたようであんなに疲れたように苦笑した。

「あー…まあ、あのひとはいざって時はすごく頼りになるんですけどね…普段の細かい仕事はホントぎりぎりまで放置です」

「そのくせそのぎりぎりの期間になりやあり得ねえスピードで処理すんだろ?」

「よく存じて」

「…そういつムカツク奴だ、あの馬鹿は」

うんうんと頷いている新一は、自分の仕事スタイルも似たようなものだと言つことには全く思い至らない。

この場に某色黒体育教師が居ようものなら容赦なく本場の突っ込みを入れていたのだが、生憎不在であった。

「つつても最近保健室にも来てねえしてつきり真面目に仕事してるもんだと思つてたんだがな」

かいかぶりだったかと首を傾げる新一に、光彦はどれほど保健室は本来サボリの場ではないと突っ込もうかと思つたが、やめた。言つたところでまあなと軽く返されるか、さっきのようにお前真面目だよなあと感心されるかのどちらかだ。

だいたいそのサボリの常連の中には、哀や黒羽もいる。もしかしくなくても自分は一番の苦労人なのではと思つて、光彦は小さく溜息を吐く。

「まさか。真面目に仕事どころか最近放課後も隙あらば帰ろうとしてます」

「…オイオイ」

それでいいのか、江戸川高校生徒会よ。

額を押さえてそう零す光彦にいよいよ疲労の影を見て新一は気の毒そうに彼を見る。

相当つつぶんが溜まっているらしい。そうでなければこの少年は他人に愚痴など漏らす性格には見えない。どうせ今日は特に会議もな

いので新一は大人しく聞いてやることにした。生徒の悩みを黙って受けとめるのも保健医の役目である。

「 昼休みは昼休みで例の ” お誘い ” で居ませんし… 」

「 例のオサソイ？ 」

聞いているうちによくわからない言葉が出て、新一は聞き返す。

「 …… 知らないんですか？ 」

きよとんとして光彦が言うので、逆に新一もきよとんとする。

つまりは知っているのが普通というリアクションなわけで、人一倍知識に関して貪欲な新一は興味を持った。

「 なんのことだ？ 」

「 …… ここ数日その話題でもちきりですよ、みんな 」

保健医という役柄のためか生徒間の話題には耳が早い新一だったが、思い当たる節はない。

そう言えば昨日まで三日間の出張だったから、その間に何かあったのかもしれない。

またあの黒バカが何かしかしたのだからと考えると、二人の右側の階段から何やら騒がしい声が聞こえた。噂をすれば影、だ。

「えー？だから俺のチャリの後ろにのればいいじゃん？」

おり曲がった踊り場から姿を見せたのは、まさに話題に上っていた黒羽である。

危険なことに器用にも後ろ向きで階段を降りながら数段上にいるらしい人物に話しかけている。

「結構よ。だいたい貴方の帰る方向真逆でしょう」

もう一人、聞き覚えのあるトーンの低い、よく通る声に新一はおや、と思う。

案の定灰原哀が仏頂面で降りてきた。

「へーきへーき！姫のためなら遠回りなんてなんのその！」

「貴方の労力云々を言ってるのではないの。なぜ私が貴方と仲良く下校しなければならぬのかしら」

「ホラ、だって実際仲よしだし？」

「面白い冗談ね」

傍から見てもいっそ清々しいほどの温度差である。

「…なんだありゃ」

新一が呟く。

なにゆえ哀を黒羽が口説いて（いるのだろっ恐らく）歩いているのか。

もっと異様なことには、周りの生徒がそれを面白そうに興味津々で見物していることだ。

（…しかも姫とか言っちゃてるよ）

若いつて怖エ、とか思いながら見ている。

「あれが最近の恒例なんです」

なんだか羨ましそうな、憤ったような微妙な表情で光彦が言う。

「は？恒例？」

新一の問いに光彦が頷く。

「数日前に会長が灰原さんに、その、…告白、したとかで」

「…黒羽が？」

驚いて思わず聞き返す。

するとちょうど近づいてきていた哀とぼつちり目が合ってしまった。切れ長の大きなグリーンアイが一瞬丸くなったのがわかる。

その様子を見てか、こちらに背を向けたままだった黒羽も哀の視線の先に気がついたらしかった。

「お、工藤じゃーん ……って、げ」

新一を見つけて、よ！と上げかけた腕が、その隣を見て固まる。

「黒羽会長…」

「あらー…誰かと思えばみっちゃんじゃん…オヒサシブリ」

「お久しぶり、じゃありませんよ！しかも何帰ろうとしてんですか！今日こそ仕事してもらいますよ」

もはや半泣きで縋るように引きとめる光彦に黒羽は観念したらしく諸手をあげた。

「はいはい…そういうわけだから、哀ちゃん、放課後デートはまた今度ね、」

「そんな予定があつたなんて初めて聞いたわね」

そっけなく返す哀に素直じゃないんだから、などと返しつつ光彦に引きずられていく。

新一が呆れたように見ていると、すれ違う直前、黒羽もこちらに気づいたように目が合った。

「…また明日ね、哀ちゃん」

交わされた瞳は鋭い笑みを浮かべていた。

遠ざかる声に哀は深く溜息を吐くと、それが合図かのように集まっ

ていた生徒も、黒羽がいなくなったのでなんだもう終わりかと散りになっていく。

ほどなく沈黙が落ちた。

「…なに」

目を合わせないまま哀がぼつりとそう言ったので、え？と新一は聞き返す。

「いつまでここにいるの」

一向に立ち去らない新一に対して言っているらしい。新一にしてみれば別に用があるわけではないので、聞かれても弱る。ただ帰っていく生徒をぼうつと見ていただらいつの間にか二人になっていた。

「いや、別に。お前こそ」

それを言うなら哀だって同じだろうと新一が言ってみると、すげなく吉田さんを待っているのよと言われた。

「あ、そ」

「…何か用なの」

「いんや？…外見てるだけだけど」

そう言つて顎で窓の外を示す。

「あ、そ」

とん、と壁にもたれながら哀が呟いた。

下校のピークは過ぎたのか、教室から少し外れた二階のこの廊下には人影がない。

窓の外から、部活のかけ声が遠く聞こえてくる。

「告白」

「え？」

「されたんだって？黒羽に」

窓の外を見たまま、新一が何気ない口調で言った。
哀は目を瞬いた。

質問の内容が意外だったからではなく、タイミングに驚いたからだ。
まるでついさっき知ったような口ぶりだ。

「告白…」

もしかしたら本当にさっき知ったのかもしれない。

昨日保健室で会うまで数日見ていなかったから、恐らく出張だった
のだろう。

(…:…というか、)

これでは毎日この保健医に逢うのが当たり前になっているような考
え方に気づいてしまって、むっとする。
そんなことはない。

「いいえ」

「は？」

告白なんてされてない、という意味合いの言葉に新一は振り返って
哀を見る。

なぜか今の短い間に不機嫌になっている。

「いやいや、照れんなよ」

「なにに照れるのよ。されてないわ」

「…じゃあ黒羽は」

顔色を変えずに言うので、もしかしたら光彦の勘違いだろうかと考
えてしまう。

「あんなの告白じゃない」

「…え」

どうやらそういう意味ではないらしい。

なかったことにしているのではなく、彼女の中でそれとして認めら
れなかったようだ。

にしても。

「…意味わかんねえんだけど」

さらに困惑した新一をちらりと見て、哀は小さく溜息を吐く。なん
だか小馬鹿にされた気がした。

「…”かもしれない”なんて、曖昧」

ああ、なるほど。

納得して、再び顔をグラウンドに向ける。

好きかもしれない、とでも言ったのだろうか。

あの黒羽にしては迂闊な言い回しだ。もしくはそんな言い回ししかできないほど衝動的な行動だったのか。

それにしたって、厳しいな。

さすが女王様。

などとしみじみ思う。

ところで、今更ながら、変な気分だ。

告白、なんて。

こんな話題でこの少女と話すのは初めてだ。

保健室には、女子生徒なんか割と恋愛相談なんかにきたりするが、しょっちゅう来るわりに哀との話題と言えばマイナーな文学作家とか医学関係のこととか（これが女子高生とは思えないほど詳しい）おおそ女子高生と話す内容とは思えないようなものばかりだったから、なんだか感慨深い。

窓の外はすっかりオレンジ色になっている。
そろそろ部活も終わるころかもしれない。歩美はテニス部だったろうか。

風がふわりと前髪を撫せた。

「愛してる」

風に流されるように、哀の耳につぶやきが届く。

どくり、と心臓が跳ねた。

くるりと新一振り返った。

目が合う。

「…とかどいしよ」

にかつと笑って白衣の男は言った。

「…」
「そしね」

壁から背を離すと、遠くで歩美が哀を呼ぶ声が聞こえた。足元に置いた鞆を取って、新一から目を離し声のほうに視線を向ける。

「悪くないわ」

向けられた背に、へえ、と呟く。

さよつなら、工藤先生。

夕日色の階段に、小さな背中が消えていく。

「あれえー…？」

累々と積み上げられた書類を首を傾げてじっと見つめてみる。

「なんか…増えてね？」

しげしげと観察してみるが明らかに厚みが、いや、もはや高さと呼んでも過言でない、とにかく机上の白い山は増加していた。

「当たり前じゃないですかあ！ただでさえサボりがちなのにここ最近
は輪をかけて、だったんですよ。最低でも半分は今日中にやっ
てください！」

いつもは気弱な光彦が泣きそうにいうので、わかったわかったと大
人しく椅子に座る。

二階の端っこに宛がわれた生徒会室は、誰がどこで手に入れたのか

大きなガラステーブルと座り心地の良い革張りの黒いソファを中央に据えた、そこはかとなく豪華な部屋だった。部屋の隅には執務机が置かれており、なかでも会長専用の木製の古びたそれには至る所に傷が刻まれている。

「てゆか、副カイチヨーは？」

悪いなと言う気はあるので怠けずにつらつら書類に目を通して判を押したり訂正を入れながら声だけで問う。

「本堂先輩ならここ最近来てませんよ。留学の手続きもあるし忙しくて行けなくなるって言うてじゃないですか」

「あ、そうだっけ」

なんとも適当である生徒会長に光彦が溜息を洩らしながら言うつと、やはり適当な返事が返ってくる。

これだけなら黒羽が生徒会長に就任したことは甚だ疑問であるが、なかなかどうしてこれで人望も企画力もある。事実現在進行形であり得ない速さで処理済みの書類が出来上がっていた。

「でも、そうなると来期の選挙はどうなるんですかね」

生徒会役員の選挙は年に二回行われ、学年を問わず立候補者から会長・副会長・書記・会計が選ばれる。

今期副会長の三年、本堂瑛祐は選挙で選ばれたはいいものの、その直後に希望していた留学が決まり現在その準備に追われている状態だった。

選挙は二回、と言っても役員に立候補する人数はそう多くないし、前期に決まった役員はほとんどの場合後期も持ち上がりなので実質後期の選挙は就任継続の確認のようなものである。しかし次はそうもいきそうになかった。

「んー…そうだなー」

ふむと考える。
が、すぐに面倒になった。

「ま、なんとかなるっしょ」

答えを待っていたらしい光彦がぐくりと身体を傾かせる。

「僕は先行き不安で仕方ないんですが…」

「ばっか！会長は俺だぜー？」

よくわからない根拠で笑い飛ばす黒羽に溜息を吐いて、光彦は諦めて再び書類へと視線を戻した。

「うっしやあー！ノルマ終了ー！」

「ええ！終わっただんですか？」

「ん。いやーさっすがにキツツイわ」

作業開始から二時間ぐらいたったところ、ぷはあと息を吐き出してから黒羽が机に突っ伏したので、光彦は驚いて顔を上げた。

見ると本当に処理済みの書類専用の箱にプリントが山積みになっている。

ノルマが半分というのは半ばあてつけの冗談だったのに、成し遂げてしまう黒羽にどうして普段からそうしないのかと悲しくすらなってくる。

「ああー…疲れたあー腹減ったあー甘いものー哀ちやーん」

なぜ甘いものの次に哀が並ぶのかは考えたくもないことだ。

突っ伏したままそう叫ぶ黒羽にどうぞとお茶を渡しながら光彦はた

め息を吐く。

「あーあー。ここで哀チャンがオツカレサマとか微笑み湛えて行ってくれたらなあー」

「…なに言ってるんですか。言っときますが明日も逃げずに残り半分やりに来ててくださいよ」

へいへいという宛てにならない返事に、むしろ教室に迎え（もとい捕獲）に行こうかなどと光彦が考えていると、突っ伏したままだった黒羽がぱつと体を起こした。

「そつだ！哀チャンをここに呼んじゃえば全て丸くおさま…」

「だめです」

「ええー」

いやな予感がしたので言い切る前にきつぱり遮る。

「ええーじゃありません！そんなことしたら先輩仕事しないでしょ？そもそも灰原さんは生徒会役員じゃないんですから」

割と重要な情報や資料を扱っているので、基本的に許可がない限り

生徒会室は役員と教師以外立ち入り禁止となっている。

そりゃあ僕だって呼べるなら呼びたいですよ、と心の中でつぶやく。ちえー、と唇を尖らせていた黒羽をよそに、そろそろ下校時刻なので戸締まりを始める。

こんなことで果たして大丈夫なのだろうか。

先日球技大会は終わらせたとはいえ、再来週には修学旅行もあつて自分は不在なうえに、帰ってくればすぐに選挙、そしてすぐに体育祭の企画を始めねばならない。

先を憂いながら夕焼けに染まるグラウンドを見下ろし苦労症の少年はなんだか遠い目をする。

「あ」

人の感覚と言うのは時として驚くほど鋭い。

第六感などと言うが、このとき光彦のそれはいち早く反応したのである。

こぼれるように背後でぼつんと落ちた声に振り返ると、普段から女子生徒に騒がれている端正な顔がニヤリと　それはもう、まさに悪だくみを思いついた悪党のように、口角を上げた。

「いーこと考えたー」

本日二回目の、いやな予感がした。

t o b e c o n t i n u e d . . .

「お、」

「…」

「寝ないの？お前」

独特の機械音が響く狭く暗い空間の中で、トイレに行こうとしていた新一は通りすぎる通路側の席に毛布を被ってシートごとに付いたテレビをぼんやりと眺めている生徒を見かけて小声で話しかける。

ヘッドホンをしたままでも気が付いたらしく、話しかけられた灰原哀はちらりと新一のほうを見た後すぐに視線を画面に戻した。

消灯して薄暗い機内の中で、画面の光を映す彼女の緑の瞳はいつも以上に目立つ。

周りの生徒はこれからに備えてか、はたまた長時間の飛行に退屈してか、ほとんどが大人しく席について身体を休めている。

「…眠くないから寝ないだけです」

「ふーん。ま、ちょっとは睡眠とっつけ。明日　や、もう今日か
しんどいぜ？」

「…言われなくても」

相変わらずのぶすつとしたもの言のだが、とりあえず頷いたことに満足して通り過ぎた。

江戸川高校二年生、春とくれば青春の一大イベント修学旅行である。私立だけあって、行先は中国、イギリス、オーストラリアからの選択制とやたら豪華である。

新一は保健医と言うことで一番希望者の多かったイギリス班に同行することになり、現在こうしてロンドン行の飛行機に乗っている。

それにしてもイギリスなんて久しぶりだ。

二回ほど訪れたことがあるが、もうかなり昔のことだ。両親の仕事の関係でよくいろんな国へ行っただし、今でも呼ばれてハワイやニューヨークはよく行くが、北欧はあまり行かない。

ハンカチで手を拭きながら、席に向かって戻っていく。ふと見ると、先ほど通った時に浮かんでいた緑の光はすっかり閉じられていた。

「各班長はキーを受け取りに来なさい。夕食は六時からだから遅れないように。解散ー」

昼間に現地の小学校で交流、難しそうな名前の古い城を見学して、くたくたになった生徒が集まるホテルのロビーに、教師の音が響く。鍵を受け取った哀の横で、重たそうなピンクのキャリーケースを引きずりながら歩美が溜息を吐いた。

「つつかれたあ！でも楽しかったね、哀ちゃん！」

「…そうね」

にこにこ笑う歩美に、小さく微笑んで哀が頷く。

ああ素敵だなと歩美は思う。最近では態度がやわらいで、よく話してくれるようになった。

笑った顔はめつたに見れないけれど、とても可愛い。

一緒に班に誘ってよかったなあとほくほくした気分になった。

「それにしても、灰原さんすごいなあ！英語ペツラペラ！うちよつとしかわからへんかった！」

歩美の隣で、同じ班の東尾マリアが興奮したように言った。ついこの前までは眼鏡の大人しそうなという印象しかなかったのだが、歩美を通してこうして話してみると意外にも話好きで、しかも予想外なことにてこてこの関西人だった。

「昔少しだけこちらで暮らしていたから…日常会話程度よ」

イギリスの小学生相手に少し相槌を打っていただけなのだが、聞かれていたらしい。

困ったような顔をして哀が言つと、歩美たちは感嘆の声を洩らした。

「そうなんだあ！かつこいいい！」

「ね！うち英語苦手やしほんま羨ましい！…あ、ペラペラっちゅーたらさあ、」

思い出したようにマリアが視線を移すので、哀たちもつられてそちらへ目を向ける。

「工藤せんせーもめっちゃペラペラやったなあ」

「うんうん」

確かに、と哀は頷く。

（まあ、なんとなく予想はついていたけれど）

だって保健室の机の上に置いてある推理小説には時折原書も混ぜられていたし、海外の専門書の話だった。

そもそも、英語がわからなくてわたわたしているあの保健医の姿が哀には想像できない。

男子生徒にまじってしゃべっている新一を見てみると、視線に気がついたらしくこちらに近づいてくる。

「なんだおめえら。じろじろ見て」

いつもの白衣じゃなく私服を着ているせいか、なんだかまるで大学生のようだと哀はこっさり思う。

「うん、あのね！工藤先生と哀ちゃんって英語上手いねって言ったの」

「そや！せんせーも海外に住んでたりしたん？」

「ん？」

歩美たちの言葉に、新一はきよんとする。

英語ができるのはもちろん幼いころから世界中飛び回る両親がいたせいだ。母親の友人には外国人が多かつたし、ごく自然に英語は覚えさせられた。実を言うと他にも何力国か齧っていたりする。それよりも。

「せんせー”も”？」

首を傾げて先ほどから一言も発していない哀を見る。恐らく話の流れからいつて彼女のこと間違いないだろう。

「…三歳から十二歳までこちらにいたわ」

促されてぼつりと哀が言う。

「あ、なるほどそれで」

納得いった、というような顔をされる。

保健室では他愛もない会話を良くするが、初耳である。哀はあまり自分の音と話したがない。

しかし、翻訳されてもないようなマイナーな海外小説の話をしても通じていたし、保健室にあるホームズの原書を手にとって目を通していたこともあった。

これで合点がいくというものだ。

（あ、じゃあもしかして…）

「なあ、お前って」

言いかけたところで、ちん、と独特な音がして目の前の扉が開く。列で待っていたエレベーターが来たのだ。

「あ、乗ろう！じゃあね、工藤先生！」

後ろに並んでいる生徒がいるので、素早く乗り込んでいく。手を振る歩美とマリアに振り返して、夕食遅れんなよ、と声をかけた。

t o b e c o n t i n u e d . . .

夕食も早々に済ませると、後は生徒の短い事由時間だ。自由時間と言ってもホテルの外に出ることは禁止されているので、実際は入浴を済ませて、三、四人ごとで振り分けられた部屋同士を行き来したりするのがせいぜいだ。

かといって高校生にもなつて、しかも海外旅行のなかなか高級なホテル内で、わいわいと枕投げや怪談話などするはずもなく、結局はみな自分の部屋で大人しく談笑しているのが大半のようだった。極々たまに、ドア越しに廊下から男子生徒の笑い声が聞こえて、それを通りかかった教師が諫める声が聞こえた。

「なあなあ、」

三つ横一列に並んだベッドの上で、枕を抱きしめながら、先ほどまで美味しいスイーツ店の話をしていたマリアがふいに緊張した面持ちで口を開く。

この年頃の女の子と言つのは、遍くおしゃべりが好きだ、と哀は常々思う。次から次へと話題は尽きず、他愛のないことを嬉しそうに楽しそうに話す。

ちなみに、その、この年頃の女の子、の中に自分が入っていない。自分はこの子たちと一緒にするにはあまりに毛並みが違いすぎるのだ。

ともかく、夕食から戻って交代で備え付けのユニットバスに入り終わると、一休みしてからまるで決まっていたかのように、『ガールズトーク』だった。

悪気はないが我関せずで、窓際のベッドで荷物の整理をしていた哀も早く早くと歩美に手をひかれ、二人で真ん中のベッドに乗っかて、反対側のベッドの上で座るマリアと向かい合うことになったのである。

なあに、と同じように枕を抱きしめた歩美が首をかしげる。時刻は現在午後十時過ぎ。

きつと今日は疲れているだろうにまだまだ床に就く気配のない二人を見て、きつと明日は欠伸をしながら市街観光をするのだろうか。哀は小さく微笑む。

「二人は、好きなひと、とかおらへんの？」

半分枕に顔をうずめておずおずと言つマリアに、哀と歩美はきよとんとする。
なんとというか。

(…お決まりのお題ね、)

そう思つとまた笑みが零れた。

「あら、もしかして東尾さんは、いるの？」

「ええ！？う、うち？うちは別に…」

面白そうに問いかけた哀に、マリアはあたふたと言葉を濁らせる。

「あー！いるんだあ！だれだれっ？」

その様子に顔を輝かせて身を乗り出したのは、言わずもがな歩美である。歩美に促されるようにじっと見つめられて助けを求めるように哀に寄せられた視線は、小さく肩を竦められるだけで返された。諦めるという意味だ。

むむむ、と唸っていたマリアは、とうとう観念したように息を吐き出した。

「…さ、坂本たくまくんや！」

あら意外、と哀は小さく呟く。

歩美はきやあきやあと興奮している。

坂本たくまと言えば同じ班のぶつきらぼうな男子生徒だ。マリアはばふつと枕に顔を沈めて黙り込んでいたが、すぐに再び上げてにひと意地悪い表情を浮かべた。

「うちが言うてんから二人もゆつて！」

「ええ！いないよお、そんなひと！」

ふるふると首を振る歩美に、マリアはあからさまに残念そうな声を上げる。

「もつたいない！歩美ちゃんモテンのにー」

彼女のその言葉には哀も同感だ。誰にでも明るく分け隔てなく接する歩美を慕うものは多い。それでも全くピンと来ていない様子の人をみる限り、未だに本気で恋をしたことはないのかもしれないと思っただ。

そんなことを考えていると、いつの間にかマリアがじっとこちらを見ている。
いやに含みのある笑みで。

「灰原さんは、なんかあるやんなあ？」

絶対経験豊富や！と良く分からない自信を持って言われて、けれどそれをあわあわと否定する可愛げを持ち合わせてはいないので、あっさりと受け流す。

「どうかしら、」

「い、いるの！？好きな人！」

驚いたように歩美が尋ねる。

それに対し、他人のこととなるとやっぱり楽しいのかマリアは意気

揚々と乗っかってきた。

「ほらあれ、生徒会長！付き合わへんの？」

考えもしなかった名前が出て、哀は目を瞬かせた後苦笑する。

「冗談はよしてちょうだい。どうして彼なの。迷惑しか被っていないわ」

さらりと言っただけ。

「ええーほんまにー？」

ああ、でもそう言えば彼のおかげで見知らぬ男子生徒から呼び出されることは少なくなっただけ。と、本人が聞いていればめめめめと泣きながら生徒会室のソファに沈み兼ねないようなことを考える。

「お似合いやと思ってんけどなあ……。会長かつこええし」

格好いい、という言葉に少なからず違和感を感じる。他の女生徒からどう見えるかは知らないが、哀にしてみれば基本的にじゃれついてくる大型犬だ。

勿論それだけの人間じゃないことも重々承知してはいるが。

「好みじゃないわ」

くすりと笑って悪戯っぽく言ってやると、マリアが感じいったように息を漏らした。

「哀ちゃんが好きになるような人ってどんな人なんだろ。なんだか想像つかないな」

視線を宙に浮かべて歩美が言う。

「やっぱり大人の男のヒトとか？」

「さあ、」

ズバリ、と詰め寄るマリアに、やはり哀がはつきりしない言葉で答えると、二人は教えてくれたっていいのにと恨めしそうな目をした。

それからも暫くなんだかんだと話していたが、だんだんと欠伸の回数も増えてきたので、そろそろ眠ろうということになった。部屋の照明を消して、ベッドにもぐりこむ。

哀のベッドだけ枕もとのライトを灯したまま、ようやく部屋全体が

就寝する状態になった。

おやすみ、と歩美とマリアがそれぞれに眠たげな声で口にする。

目を閉じて静かになった二人を見て目を細めながら、哀はぱちん、と最後のライトのスイッチを落とす。

「…おやすみなさい」

明るかった部屋は窓のカーテンから漏れる光だけを残して、真っ暗く色を変える。

(…好きな人、ね)

無邪気に話していた二人を思い出しながら、考える。

大人の男のヒトだとか、格好いい先輩だとか、そんなものなのだろうか。

自分が好きになるのがどんな人かなんて、答えようもない。

だって、そういう意味で誰かを好きになったことなんて、ないのだから。

まどろみを抑えるようにただその細い光だけを真っ直ぐに見詰めて、哀は身体を横たえずにだんだんと深くなる二人の呼吸の音を聞いていた。

t o b e c o u n t i n u e d . . .

13 (後書き)

マリアと坂本くんは原作にもいたクラスメイトです。
ガールズトークする3人かわゆす！

消えない。

どれだけ明るい場所に言っても、光を浴びても、足元に絡みつくように闇がついてくる。
振り切るうとしても離れない、どこまでも、どこまでも。

すぐそばで真つ暗な世界が私を呑み込もうとしている。

だれか　　だれか助けて。

そう叫ぶのに、声は喉の奥で死んでしまっている。

縋るものなどないのに伸ばす手は、何にも届きはしない。

男が、いる。

あの男だ。真黒な　　。

「可哀そうに、なあ、」

低く笑いを含んだ声で言う男の目は冷たい。
聞きたくない。
聞きたくないのに、声は響く。

「お前はこれからずっと、」

「...」

声になりきららない悲鳴をあげて、哀ははっと目を開ける。
言い知れない恐怖が身体を覆い、冷や汗が背中を伝う。こらえきれない震えを腕でぎゅっと身体を抱きしめることで抑えて、それでも苦しくなる呼吸を手のひらで押しこめるように必死に落ち着かせる。横目に隣でぐっすりと眠る二人を確認してから、哀はくしゃりと前髪を掻き上げ、自嘲的な笑みを漏らした。

(やっぱり駄目ね…)

夜明けまでは起きておこうと思ったのに、疲れの溜まった身体はいつの間にか眠りに落ちていたらしい。
もう何度見たかも知れない悪夢は、この真っ暗な部屋で目を閉じると未だに瞼の裏に蘇る。

はー、と深く息を吐いてから哀はベッドから静かに抜け出した。
眠気を追い払いたかつたのと、あの悪夢を見た後で、いつまでもこの暗い部屋にいたくなかった。

安らかな寝息を立てる横を、そっと音をたてないように通り過ぎて、部屋を後にした。

がちゃん、と転がり落ちてきた英字プリントがされた缶を取り出して、開封すると一口呑み込む。

「うあー…」

首に片手を当ててぐるりと回すと、ごりりと嫌な音がする。

幼い頃から、やれ低反発マットだやれウォーターベッドだと、やたら寝具にこだわる両親のもとで育ったせいか、旅行先の慣れないベッドでは大抵こうだ。

やわな身体であるつもりはないが、どうしても首や腰が軋む。いつそ枕無しで寝てやるのかななどと思いながら、催眠効果を期待して選んだ、普段ならめったに買わないミルクティーをまた一口飲む。

このまま眠らないわけにもいかないの、とりあえずしばらく雑誌でも読んでこれだけ飲み終わったら部屋に戻ろうと自動販売機横から少し離れた場所にある、肘掛椅子が置かれたちよつとした娯楽コーナーへ足を向ける。

こちらに背を向けた椅子の背もたれから、見覚えのある色の頭がわずかに出ているのを見て、立ち止まった。

「…え。なんでお前ここにいんの？」

「…貴方出会った時に言っていない？その台詞」

胡乱な瞳で見られて、そうだっけかと首を傾げる。

そう言われればそんな気がしなくてもない。

とにかく予想もしないところに現れるのだ、この少女は。

水色の薄手のカーディガンを羽織ってソファに膝を抱えて座る哀の顔は、少し疲れているように見えた。

加えてどこかぼうつとしている気がして、つい保健医の癖みたいなもので彼女の額に手をやる。

「…っ、」

「あ、わるい、」

びくり、と。

最近では慣れきっていたのに大袈裟なほどに哀の肩が跳ねて、新一は直ぐに手を引っ込めた。いいえ、と伏し目がちに哀が小さく呟く。

「…あー、熱はねえみたいだな」

正面に座りながら言った新一の言葉に哀は訝しげな目を向ける。

「調子悪そうだし、お前」

特に意識せずにぼそりと新一が言った言葉に、哀は微かに瞠目する。確かに出発時から体調が思わしくないのは自分でも気づいていたことだが、特別表面にそれを出していたつもりはない。

修学旅行だからとはしゃがず大人しくはしていたが、恐らくそれはいつもの哀の言動と何ら変わらないように見えていたはずだ。

少なくともこの保健医の前では。

「そ、んなこと…」

「あんだろ」

否定しようとした言葉にかぶせて言ってやれば、ぐっと詰まらせて黙り込む。

己の迂闊さを後悔するような哀の様子に、新一は小さく溜息を吐いた。

「つーか疲れてんならこんなとこいねえでさっさと眠れっつ。明日早いぜ?」

ふと時刻を見れば、すでに日を変えてから二時間を過ぎている。勿

論消灯時間はとうに過ぎているし、廊下には人氣がなく静まり返っている。

「別にいいでしょ。目が覚めてしまったから気分転換に部屋を出てみただけ…センセイこそ、もう戻ったら？まさか、慣れない寝具じや眠れないなんて、ナイーブなボンボンみたいなこと言わないわよね？」

くすりと揶揄混じりの笑みを浮かべながら言われて、今度はこちらが言葉に詰まる番だった。

(こいつ…わかってて言ってる…！)

先ほどから首をさすっていたので、そこから推測したのだろう。大した洞察力と推理力だが、新一にとっては全くいただけない。だから、なんとか固い笑みを返す。

「たりめーだろ？ちよつと目が冴えちまつただけだ」

「あら、そう」

面白そうに目を細めたまま言う横顔は、やはりどこか心ここにあらずと言った感じで落ち着かない。

沈黙が落ちてから、ふと思いついて口にする。

「そついやさつき言おうと思ったんだけどよ」

さつきと言うのは夕食前ときだが、哀はピンとこなかったらしく頭を傾ける。

「お前つて、やっぱハーフかなんか？」

問われてぱち、と瞬いた瞳は初めて彼女を目にしたときと変わらずに綺麗な緑色で、そこに影を落とす髪の毛は純粹な日本人の地毛と言つには些か明るすぎる。

顔立ちは整い過ぎているにしろ東洋系だが、肌の白さはコーカソイドのそれに近いと思う。

「…そうよ。母親が、イギリス人」

本人も特に隠したりするつもりがないのか、あっさりと言へる。それならば幼いころこちらに住んでいたというのも母親の故郷だからなのだろう。

「ふーん…じゃあやっぱ懐かしかったりするんのか？イギリス」

「…どうかしら。私が住んだのはこの辺じゃないし　それに、懐かしむという感情なんて…浮かばないわ」

最後のほうは新一に言つてもなく呟くように言葉を紡ぐ。その眼が

一瞬無機質なガラスのように冷たくなった気がして、新一は息をのんだ。

ふあ、と猫のように短い欠伸をして、その冷たさは一瞬にして消えていた。

「…そろそろ戻るわ」

「あ、おう」

貴方は？と聞かれて、俺も戻る、と立ち上がる。

部屋の前で扉に手をかけて、新一を振り返った。

「それじゃあ、」

「ええ、おやすみなさい」

何気なく言った言葉に、新一がわずかに驚いた顔を見せる。そしてすぐに、表情を和らげた。

「ん… おやすみ」

掛けられた返事が耳に届いて、少しだけ、ほんの少しだけ、この声を忘れる前に目を閉じれば、安らかに眠れるような気がした。

t o b e c o u n t i n u e d . . .

残り半分となった修学旅行、今日は班での自由行動となっている。ロンドン市内を中心に、時間内に戻ってこられるならばどこへでも行るので、あらかじめ班で計画していた内容に沿って、哀たちはリージェンツ・パークやコベント・ガーデンを回っている。

「楽しいねえ！いいなあ、歩美もこんな町に住んでみたいなあ」

無邪気に喜んでいる歩美に、マリアも頷いている。

隣では、直ぐその店で買ったアイスを両手に持って嬉しそうに食べている児島元太を坂本たくまが呆れたように見ている。

ふと上を見上げると、北欧特有の刺すような日差しが惜しみなく光を振らせていて一瞬ぐらりと視界が暗くなった。

「次、どこいくんやつけ？」

「ええつと…」

マリアの言葉に、歩美がポケットに入れていた紙を取り出す。

「あ！ウエストエンドだよ！ほら、シャーロック・ホームズの！」

歩美の言葉に、アイスに夢中だった元太が話に加わった。

「お！そっか、次ベーカーストリートだよな」

計画の段階で、ベーカー街に行こうと一番乗り気だった元太がわくわくした様子で言う。

なぜ本など一切読まないという元太がシャーロック・ホームズに興味があるのかというと、本人いわく漫画で読んだからだという。他の班員もとくに異論はなかったし面白そうだということ、早い段階で目的地として決定されたというわけである。

早く行こうぜ！という元太に苦笑いしながら、一行はベーカー・ストリート駅に向けて足を進めた。

「…ちゃん、…哀ちゃん？」

はっと目を開ける。

地下鉄の車内で揺られながら、ついついぼうつとしていたらしい。なんだか酷く瞼が重く、息苦しく感じる。

「…ごめんなさい、少しぼうつとしてしまっ

「大丈夫？次降りる駅なんだけど…なんか顔色悪いよ？」

心配そうに顔を覗き込まれたのでゆるく微笑む。

大丈夫よ、と言つとまだ納得いかないような表情で、調子悪いならすぐ言つてねと頷く。

ほどなく降車駅に着いて、五人で駅を出た。

少しばかり現代調のビルや看板が混じってはいるが、小説の面影を残した黄褐色の煉瓦の建物が立ち並ぶ光景に、歩美たちは目を輝かせる。

「ねえねえ、どこが221B？」

早速ホームズが住んでいたとされていた住居に該当する場所を探す。きよるきよるとあたりを見回す歩美に、元太がうーんと、とパンフレットを開いた。

「あれでしょう、あのビル」

「ええー！」

前方の建物の隙間からわずかに飛び出す白い塔屋の建物を指差すと、歩美たちが驚いたように声を上げる。

「あれなの！？」

本来原作中時代にはベーカー街に221Bは存在しなかったと言う

のは有名な話で、また現在そ221Bにあたる箇所を内包しているのがこのアビーナショナルと言う住宅金融組合の建物である。計画の段階でその辺のことは調べていたはずなのだが、と思いつつ哀は頷く。

「行ってみる？」

「それより先にホームズ博物館に行こうぜー」

「それいい！」

歩美たちが話している間、哀は少しだけ寄って壁に寄り掛かる。

ああ、目が重たい。

なんとなく件の221Bに目を向けると、見覚えのあるシルエットがあった。

「あ、」

短く漏らした声に反応した歩美が振り返ると、哀の視線の先を追って行く。

「ああー！工藤先生だー！」

うそ！とマリアが続いて視線を向ける。

恐らくプレートのあるだろうあたりを眺めていた男は、向けられる視線に気づいたのか、こちらに振り向いた。

目を丸くして、それから近づいてくる。

「　　よお、お前らもホームズめぐりかー？」

にかつと笑って片手を上げる姿はとても教師だなんて思えないなど、哀はぼんやりと思う。

そして同時に、ホームズめぐりするのなんて貴方ぐらいよと言ってやりたくなった。自分たちはいくつかの目的地のーか所に入っただけである。

この保健医といえば　保健室の彼のデスクの上にしぼしぼ置かれている文庫本やハードカバーの多くにホームズシリーズがあったし、よく会話の端々に嬉しそうにホームズの台詞を挟んできたりする。哀もコナン・ドイルは一通り読んでいたし嫌いではなかったので、なまじ話がわかる分会話によく上った。

だからわかる　この保健医は間違いなく生粋のシャーロックアンである。

そう思っではいるのに、揶揄したり皮肉ったりする気も起らなかった。

息が苦しい。気分も悪いし、頭も痛む。

目を閉じると、歩美たちの話す声が遠くに聞こえた。

「じゃあ工藤先生も一緒に行こー！」

歩きだした気配がして、ついて行こうと壁から離れる。閉じていた目を開けると、視界がぐるんと回った。

「　　つ、灰原！」

傾いていく落ちるような感覚と、それが止まって受け止められた感触を最後に、意識は途絶えてしまった。

t o b e c o u n t i n u e d . . .

目蓋を閉じているのだから暗いか明るいかなんて曖昧にしかわからないのに、それでもその少しの差に左右されてしまう自分の弱さに呆れていた。

きっと温もりとか明るさとか、そういうもので拭えるんなら原因は不安や恐怖とか、とにかく心の奥底にひっそり巣食うものなんだろうと思う。

いつだってそこまで考えて、やっぱり自分の弱さに自分が嫌いになるのだ。

目覚めてまず始めに感じたのは、違和感である。

まずこんなに穏やかに意識が浮上することなんて最近ではめったになかったし、それにじわじわと頬とか耳辺りに感じる温度が、なによりの異変だった。

は、と目を開いた途端、かちりと目が合った。

「！」

「おー、」

直ぐ目の前に見える光景がよく理解できない。

しかし直ぐに、保健医の膝上のあたりに頭を置いて横になっているのだと気付いた。

どうやら道から少し離れた公園のベンチに座っているらしく、新一は背もたれにかけた片腕の手のひらをひらひらさせた。

「ちょ、や、」

この状況が何とも言えず嫌で、起き上がろうと体をよじるのに、上から大きな手で頭を押さえつけられてあえなく沈む。

たったそれだけの動きなのに胸がぐるぐるして、瞼の裏が暗くなっ

「ったく、大人しく寝てる」

言いながら眉根を寄せている。

心無し言葉に棘があるのは気のせいじゃないだろう。
今更ながら気を失ったのだと思いついた。

「…平気、です。手、放して」

「ばーるー、平気なわけあるか。顔真っ青だぞ」

「……」

言われて、言い返せなくなった。

明らかに怒っている。

せめてもの反抗で、仰向けになっていた身体を新一の膝側に横に向ける。

「多分、睡眠不足とか貧血とか、いろんなもんがまとまって倒れたんだろうよ……お前、朝飯ちゃんと食ったか」

「…少しは」

答えると、呆れたように溜息を吐かれる。

今朝は気分がすぐれなくてあまり口にできなかった。

そもそも朝はほとんど食べ物を受け付けない体質だ。

「確かに昨日寝るの遅かったとはいえ…一昨日の夜は眠ったか？飛行機の中では？」

「眠っ」

「嘘は、ナシだかな、」

遮られてから、見透かすようにじっと見下ろされたまま言われて言葉に詰まる。

思わず黙り込んでしまうと、よりいっそう思い切り眉を顰めた。

「…寝てねえんだな？」

は、「とやっぱりこれ見よがしに深く息を吐かれる。

こればかりは言い返すことも出来なくて、変わらず黙り込んだ。

「…お前なあ。三日間ろくに寝てなけりや、そんなの倒れて当たり前だつつうの。まさかわくわくして眠れませんでしたっー質でもねえだろ」

「……」

「…おいコラ無視か」

「煩いです、耳元で」

「おっまえは…！」

ふるふると怒りを抑えている新一を受け流して、他の子たちはと訊く。

「…俺が見てるから行ってこいって言った。お前だってそのほうが良かっただろ」

知ったように言われて少し癪に障ったが、実際言っ通りなので小さ

くありがとう、と呟いた。

それを聞いて気が抜けたのか満足したのか、さっきよりも柔らかくした声で、おう、と返事するのが聞こえた。

ベンチから少し離れたところでは、小さな子供が噴水の周りを駆け回ったり、老人が犬の散歩をしている。

(…ていうか、)

今のこの状況は、やっぱり結構恥ずかしいんじゃないだろうか。

頭の上で、あー歩き疲れたやっぱ運動不足だなあなどとぼやいている男は平然としているが、さっきからちらちらと人目を感じるし、なにより、頭を預けている箇所から感じる保健医の体温であるとか、呼吸のたびわずかに自分の頭も上下するのが、なんともいえず耐えきれないような気持ちにさせる。

そう、これは 酷く、むず痒い。

やはりもう一度この体勢から解放するよう交渉してみよう、と口を開きかけたそのとき。

「あのさ…もしかして、眠れねえのか？」

急に話を戻されて、何のことかと思う。

「ほら、いるだろ、環境が変わると寝られないとか、誰か他のやつがいたら眠れないとか。それとも不眠症？」

言いながら、無意識にか哀の髪をくるくると指で弄んでいる。

「…環境が変わると、って…それは貴方でしょ」

ぼそりと言えば、後ろでぐっと言葉に詰まるのを感じてひっそりと笑う。

「…暗いと、」

「あ？」

「暗いと…明るい場所でない、眠れないの」

懺悔するように吐露した哀に、新一が言葉を失う。

消灯された飛行機内。歩美たちと同室の部屋。

普段ならば電気を点けたまま眠りにつくけれど、そうはいかなかった。

気持ちの問題だと割り切って、試しに暗闇で目を閉じることもしなかった。

だって、眠ってしまえば否応なしに引きずり込まれてしまう。

このことを誰かに話したのは初めてだった。

明りがないと眠れないなんて、まるで幼い子供みたいで恥ずかしかつたし、何より自分の弱さの表れみたいで、それを他人に話すことは自分自身でその弱さを認めることになる気がしたからだ。

事実、話してしまった今、思い知らされるようで気分が滅入った。それなのに、どうしてこの男に話す気になったのかは分からない。

「自分でも、なぜなのか分からないけれど…明りを点けずに眠ると

」

そこで一旦言葉を切る。

言葉に出して思っただけで、また気分が悪くなった。頭の中心から響くようなくさずきした痛みを堪えながら口を開く。

「いつも同じ夢を、見るの」

とても恐ろしい、夢を。

t
o
b
e
c
o
u
n
t
i
n
u
e
d
...

新一がイギリスから帰ってきたのが金曜の早朝。そのあと泥のように自宅で眠り、翌日の夕方に服部から誘いの声がかかったのだ。

体の怠さから断ろうかと思っただが、その辺に全く遠慮のない服部に押し切られる形で今の状況となってしまった。

故にすぐ側には開きっ放しのキャリーケースが置かれている。

特に酒が好きという訳ではないけれど、なんだかんだ定期的に居酒屋なり服部のアパートなりで飲んでいる。

酒を飲むことというよりも、飲んでいるときの雰囲気が好きなのかもしれない。話の合う服部も飲み相手には申し分ない。

「なんやそれ。生徒の悩みかなんかか？」

ご苦労なこつちゃ、とか言いながらグラスに口を付けて舌鼓を打つ。めったに帰らないくせにやたら高い酒を好む父親が家にため込んでいたものだ。

「あーまあ、そんなもん」

曖昧にぼかすとグラスの中身を回して弄びながら、せやなあと思案するように視線を上向ける。

「白い着物着とる髪の毛の長ああい女に追っかけられるとか、緑のデロデロした化けもんに足引っ張られるとか？」

いや、まあ確かに怖いけど、と新一は乾いた笑いを漏らす。

恐ろしい夢を見るのだと、彼女は言った。

表情は見えなかったが、酷く不安げで（不安げという基準を灰原哀という少女の枠に限定して当てはめた場合に、）か細い声音で。

そもそもにして、あの少女だ。

弱みなんて他人に見せないような、つけいる隙を与えないような人間なのに。

（あいつが怖いもんで、なんなんだろう？）

今までの彼女を見る限り、服部が言うような幽霊とかモンスターとかの類の非科学的な物を恐れるようには思えない。

「ん…」

目を閉じて唸っている新一を見て、服部は再び口を付けようとしていたグラスをテーブルに置いた。

「…深刻なんか？」

「え？や、まあ、な」

眠れない、と言うのはストレスのたまることだ。身体的にも、精神的にも。

けれど明かりがあれば大丈夫だという。

暗所恐怖症の一種みたいなものなのかもしれない。

どちらにしても彼女がそうなった要因があるには違いない。

「…なんだよ」

ふと視線を感じて瞼を開けば、なんだか意外そうに服部が見ている。

「いやあ、自分ほんまに保健室の先生やってんなあて思て」

「喧嘩売ってんのかてめえは」

顔をひきつらせて言うと、取り繕うように目の前の同僚は笑った。

「ちやうちやう！自分がそない話するん珍しいし！」

言われて、睨むのも忘れてきよんとする。

そうだろうか。

「えらい気にしてんなあと、思ただけや」

それだけ言ってまたグラスを呷る。

ペースが速い気がしないでもないが、笨なので大丈夫だろうと放っておく。

言われてみれば、なんだか気にかげ過ぎているかもしれないと新一人は自分もビールを呷りながら考える。

保健医なので生徒のことを気にかけるのは当たり前なのだが、実を言うと今回は自分でも持て余している自覚がある。

相談なら何人の生徒から受けたことがあるし、人生経験をより長く積む年長者として、専門知識を持つ養護教諭として、的確なアドバイスや対応をするのは仕事上慣れいるし当然のことだと思っってきた。

それでも、なんとなく今回のことを自分の中で容易に片付けられないのは、相手が灰原哀であるからなのだろうと思う。

知識豊富で、どこか年相応な子供っぽさを窺わせない彼女は、意識せずとも他の生徒とは別のカテゴリーを持って対してしまう。

教育者たるもの生徒に対しては平等に接しなくてはならないと思ふものの、まあそこは人間なのだし、とも思う。

癪ではあるが黒羽なども同じだ。だいたいにして高校生にもなればそこの教師よりも随分と精神年齢の高い生徒もいるもので、その辺の境界線を年齢だけでは区別できないのは確かだった。

加えてあの少女は、酷く不器用だから。

変なところで大人びて、周りの人間より抜きんでているくせに、誰もができるようなことが、できなかつたりするのだ。

『恐ろしい、夢を』

あれは、強がりの彼女から零れ落ちた小さな弱音なのだ。たった何文字かの言葉に、計り知れないような心もとなさが凝縮されていた。

聞き流してはいけない気がした。

だからこんなに気になっているのかもしれない。

缶の口から見える淀んだ闇の溜まる底を見つめて、思う。

(…怖い夢、見てなきゃいいけど)

t
o
b
e
c
o
u
n
t
i
n
u
e
d
...

18 (前書き)

評価感想お待ちしております！

サイトのほうも宜しく願います。

Beat up her! <http://m-pe.tv/u/?peckuu>

別に意識しているわけではないが当然のことながらある程度の予想はしていた。

だがしかし、偶然途中で会った歩美と昇降口へ向かっている途中に二階の端の窓が壊れんばかりの勢いで開いた瞬間、哀は自分が甘かったことを知った。考えてみれば、一度だって場所を弁えたり空気を読むのを見たことがない。

「おはよう哀ちゃんおかえりー！会いたかったよー！」

生徒会室の窓から、朝っぱらからテンションの高い声が響く。視界の斜め上端で身を乗り出してぶんぶんと手を振る黒羽に、哀は酷い頭痛を感じた。

「俺寂しくて死ぬかと思った！マジで！哀ちゃん不足で瀕死！」

登校中の生徒が久方ぶりの光景にくすくすと笑いを漏らしたり、面白がって囃したてたりする。

尚も声をかけ続ける黒羽を無視して、哀は速やかに校舎内に入った

のだった。

修学旅行明け、久々の登校となる今日。

なんだか急に現実に戻った感覚にうんざりしながら授業を受け、昼休みの現在名残惜しさからかに教室の至る所で旅行先での話がされ
ている。

「あ。そういえば今日は会長来ないね」

「あ、ほんまや」

「…来なくて結構よ」

ふと思い出したように歩美が言うのを、きつぱりと切り捨てる。ク
ラスメイトも同じことを思っているのか、しきりに哀と教室の入り
口を気にしている。

「そっかあ、選挙近いもんね。流石に忙しいんだろっなあ」

「こんなところに来る暇なんてないはずね。円谷くん帰って早々大
変でしょうね」

「会長ちゃっうねんや」

タンブラーに入った珈琲を啜る哀に突っ込みながらマリアは苦笑した。

同年の円谷光彦が、仕事はできるがサボ癖のある会長に手を焼いているのは有名な話だ。黒羽が哀に熱を入れだしてからはなおさらである。

「…いつそのことずっと忙しくしていてくれないかしら」

眉をしかめながらいたって真剣に哀が言うのでマリアは黒羽を気の毒に思いつつも噴出した。

修学旅行を通して仲良くなったこの灰原哀という少女は、近寄りがたい高嶺の花という印象であったが話してみれば至って普通だ。

人気者の生徒会長にあれだけ熱烈にアタックされても顔色一つ変えずに靡かない。お高くとまっている、と陰で嫉み混じりに悪く言う子たちが居るのも知っているが、マリアにはなんだか好感が持てた。感情表現が不得手なのか、一目では分かりにくいが優しくいい子だと認識を改めていた。

もう選挙かあ、と退屈そうにマリアが言う。

「あーあ、人生最後の修学旅行も終わってもうたんやなあ…」

見るからに悲しそうな顔で、つまみあげた卵焼きにパクリと齧り付く。その様子を見て、歩美も頷いて笑う。

「あつという間だったもんねー。もう一回行きたいなあ」

帰って来たばかりなのにそんなことを言う歩美に、珈琲の入ったタンブラーに口を付けながら、哀は小さく笑った。

教室でのこんなに穏やかな昼食はいつぶりだろうと、無意識に機嫌よくなりながら、今朝なんとなく気分で作ったサンドイッチを一切れ取る。

「でもびっくりしちゃった！博物館から帰って見たら、哀ちゃん膝枕されてるんだもん！」

「そうそう！いやあ、工藤先生って見事に乙女のツボついてきはるわあ」

うんうんと頷くマリアに、どこがツボなのかと思いつつも、口を付けていた珈琲を一瞬呑み込み損ねそうになって、ゆっくりと飲み下す。だいたいあれは不可抗力だ。あのあとは大変だったのだ。博物館が最終地点だったから良かったようなものの、いたって本気で哀をおんぶしようとする新一を必死に断りながらなんとかみんなでホテルまで戻った。途中で少しでも俯こうものなら無理やりおぶられかねないので、寝不足も貧血も忘れる勢いで歩いた。

口には出さないものの、帰国までの間さりげなく常時自分に気を配っている保健医に、感謝を通り越してうんざりしてしまった。

(……過保護なのよ)

けれどもあの時、膝を貸したまま要を得ない話に耳を傾けてくれたことに、心のどこかが僅かに軽くなった気がしている。真摯に向き合ってくれたことが、それとも吐露するという行為それ自体によるものかは分からない。

それでも、少なくとも一度目覚めてから歩美たちが戻ってくるまで、いつの間にか再び眠りに落ちていたほどに、保健医の温みに無防備に浸ってしまっていたことは否定しようもない事実だった。

「ほー？それは是非とも詳細を聞かせていただきたいナ」

直ぐ側の窓から聞こえてきた声に、哀たちは一瞬動きを止める。

「わわっ、黒羽会長！」

「やつほーハニー！遅くなってごめんね」

遅ればせながらに外から窓枠に頬杖をついて登場した黒羽に、待ってましたとクラスが騒ぐ。

「…誰も待つていないですけど…盗み聞きなんて随分と悪趣味ね」
「やだなー盗み聞きじゃないよ、哀ちゃんの声は自動的に拾うようになつてんの」

いったいどこのロマンス小説の台詞かという胡散臭い言葉に、歩美は苦笑いした。
言われた本人である哀は溜息を吐くと黙ってカーテンを閉め、布に阻まれて黒羽がえええつと悲壮な声を上げた。すぐにシャツ、と取り払われる。

「いーなー俺もいくらでもしたあげるよ膝枕ー。むしろぶっちゃけしてほしい派だけど」

「…なら保健室に行かれたらどうですか。工藤先生に頼んだらいいんじゃないかしら」

「ははははまた照れちゃって哀ちゃんてばー」

「どつやら話がかみ合っていないようね。おかしいわねこは日本のはずなのだけれど」

久々のやり取りに、周りの目もなんだか生温かい。
哀は居心地悪くなりながら再び嘆息し黒羽を見た。

「…選挙が近いのに随分とお暇なんですね」

「んーまあね」

へらりと笑いながら黒羽は哀のランチボックスからサンドイッチをつまみ取る。哀も慣れたもので、眉を顰ただけで特に何も言わない。美味しい毎日食べたい！と黒羽は大袈裟に感想を述べた。平らげて、指を舐めながら口を開く。

「あ、でも今日はちゃんとした用もあつて来たんだよ？」

「…用？」

意味深な笑みを浮かべる黒羽に、もはや悪い予感しかしない。そうそう、と頷くと、黒羽はじっと哀の目を見つめた。

「生徒会、興味ない？」

次の瞬間、カーテンのみならず窓の二重ロックまでがっちり施錠されたことは、言うまでもない。

t
o
b
e
c
o
u
n
t
i
n
u
e
d
...

いつそ憂鬱と言っても過言でない心中を落ち着かせて、目の前の重厚な扉をノックする。

「失礼します、」

嫌なのかと聞かれれば、あれでも会えばいつだって可愛がってくれるのだし全力で拒否するようなことはないのだが、小さいころから心から喜べない節はある。

なぜかというと。

「あ、しーんちゃんあん!」

こちらの姿を認めるなり両手を広げて飛びついて来た華やかな女性に顔を引き攣らせる。
幼いころからほとんど変わらない容姿は母親と瓜二つで、若々しさもここまでするともしや魔女なのではと感じてしまう。

「ちょ、わかったから。離れてくれ、文代さん」

げんなりした声で言うと、海外にいる母を彷彿とさせる顔を持つ、彼女の妹　江戸川文代は、年齢に似つかわしくない仕草で唇を尖らせる。

「だって、新ちゃんったら就任前に挨拶に来たつきりずうつと音沙汰なしなんだもの！いつでも理事長室に遊びにいらっしやいって言ったのに！」

「いやいや。理事長室は遊びに行くようなところじゃねえから！」

至極冷静に突っこんで見せると、カタイこと言わないの！とばしりと背中を叩かれる。

母も　勿論目の前の伯母もそうだが、どうやら藤峰（彼女たちの旧姓である、）の女たちは例にもれずパワフルらしい。

何かの拍子に二人が揃おうものなら、どれだけ突飛な行動を取ろうと自分が口を挟むすきなど微塵もないと経験で悟っている。

現にこの学校に赴任することになったのも、母が思いつきに発した

一言に伯母が乗り気になったからである。学生時代に気まぐれに始めた株やら、父親が副業で手を出している事業の手伝いやらで収入には困らないものの、特にすることもなく片手間に伯母の学校経営をちよこちよここと手伝っていたところでの話だ。

あの二人が意気投合してしまえばもう止めるものなどあるはずもなく、拒否権などこへやらといった様子であれよあれよと言つ間に養護教諭として採用されていた。

養護教諭免許取得とか、こちらの希望進路とか、母と伯母にかかればそのような問題はそっちのけである。半ばだまされるように免許を取らされ、更に騙されるように採用試験受けさせられ。

「それで、どう？此処にはもう慣れた？」

理事長室の中央に居を構える革張りのソファに促して、文代さんが問う。

「ん、まあ。高校生って思ったより大人だし、保健医つつのもなかなかやりがいあるし…楽しいよ」

出された紅茶に口を付けながら素直にそう言つと、文代さんは優しく目を細めて満足そうに、そう、と言った。そしてそれから、うふふと笑う。

「いいわあ、若いって！あたしもあと十歳若かったらねえ…まだまだオトコノコたち守備範囲なんだけど。羨ましいわあー」

「コラコラ！ていうかなに然も俺が手エ出してるみたいに言ってるだ。犯罪だつづの」

そもそも喻え若返っても十歳ぼっちじゃ…などとは言わない。というか言えない。命知らずではない。

本人に悪気はなくても仮にも教育者としての問題発言に呆れながらそう言つと、文代さんはきょんととして俺を見る。

「あら？出してないの？」

「…文代さん…」

新ちゃんモテてるでしょうに、と言つ伯母にがっくりと疲れたように肩を落として名を呼ぶと、流石に文代さんもからかい過ぎたと思つたのか苦笑いする。

「そうよねえ、新ちゃんは優作さんと違って真面目だもんねえ」

「いや、そういう問題ではなく…」

父親の名前まで出されて、もはや返す言葉もない。

楽しそうにこちらを見て無邪気にきゃらきゃら笑つと

、文代さんほでもねえ、と続ける。

「マジメな話、手は出すのはよくないけど、好きになっちゃダメとは言わないわよ?」

「は…:?」

真剣な顔でずいと言い募る文代さんに、眉を顰める。

「だって、もしホントに好きならしょうがないじゃない? まあ、だからって勧めはしないけど」

にっこり笑う文代さんに、なんと言っていていかかわからず困る。

「…いや、別に好きにならねえけど」

こう見えて仕事は真面目にやるほうだ。

公私の区切りはきっちりつけるし、それでなくとも少なからずジェネレーションギャップのある、まだまだ幼い生徒をそういう対象に見るつもりもない。

そして、そういうこちらの思いとは裏腹に生徒からすれば自分が十分恋愛対象になりうるのだということも理解している。

だから扱いには気をつけるし、それでもぶつけられる想いはやっぱりと、しかし徹底的に拒否している。

「そお？それならそれでいいのよ」

ふふふ、と明るく笑う。

どうしてこんな話をするのかはよくわからないが、気まぐれだったのかもしれない。

腕時計を見ると、此处に来てから随分たっていて、仕事に戻る予定だった時間はとうに過ぎている。

そろそろ、と立ち上がる。

一言二言交わして扉に手をかけると、またいらっしやい、と文代さんが見送ってくれる。

「それじゃあ、」

「がんばってね！新ちゃんカタいんだから、もっと力抜いて好きなようにしなさい！」

それはどうだろうという発言に苦笑しながら理事長室を出ると、文代さんが扉から顔を出して、新ちゃん、と呼びかける。振り向くと、にっこり笑われた。

「人生、何が起こるか分からないものよ？」

ばいばい、と手を振って、がちゃんと扉が閉まる。

意味深な言葉に首を傾げながら、それでもよくわからない発言はあの人のいつものことだと、仕事に頭を切り替えた。

ふわああ、と欠伸を漏らすと、ふわりと風に吹かれて目を丸くする。開け放たれている窓に、直ぐに思いいたって窓際のベッドの覆いとなるカーテンを横に払う。

「おーい、またサボりか …」

外に植え込まれた木々の木漏れ日で、日当たりがいい具合なベッドに投げかけた声を途切らせる。

いつものように小さく丸くなって寝ている少女は、苦しげに眉を顰めている。

寝息は不規則で、時々か細く呻いている。

いつも同じ夢を、見るの

「……………」

ゆり起そうとしていた手を下して、ゆっくりと頭の横に腰掛ける。

ぎゅっと顰められた顔を宥めるように、そっとそっと頭に手を置く
と、ふっと息が和らいだ気がした。

柔らかく髪を梳いてやると、だんだんと表情が穏やかになって、す
うすうすと穏やかな寝息へと変わる。

そのことに安堵しながらも、起きている時とは正反対のあどけない寝顔に思わず笑みを漏らした。

マジメな話、手は出すのはよくないけど、好きになっちゃダメ
とは言わないわよ？

ぴたり、と手を止める。

「…ないないない」

咳いた声に、ん、と小さく寝言が返って、びくりとした。

t o b e c o n t i n u e d . . .

休み時間。

廊下に溢れる生徒の波は、さながらモーゼの海割りの如く次々と左右に避けてゆく。

その中心を歩くのは、精巧なまでに整った顔、そして大きな瞳に青く燃え盛る炎を宿した少女　灰原哀だった。

がらびしゃっ、と些か乱暴に開かれた教室の戸に、短い休み時間をクラスで過ごしていた3年A組の面々は何気なしに視線を向け、そして目を丸くして固まった。

それは、入口に立った人物の奇特さ故か、それともその怒りに満ちた表情故か。なまじ整っている分迫力は凄まじい。

「うわ！クールビューティーだ！」

「うっそマジでか！なんでここに！？え、もしかして…！」

ざわざわと囁き合うのを目にも留めず、つかつかと教室に押し入ると端の席に座って喋っている一団のもとへと近づく。話に夢中で気づいていなかったのか、それでも雰囲気を感じ取って振り向いたそのうちの何人がそのたびに驚いて凍りついている。

自然と開いた人の向こうに見えた人物は、漸く気づくとばあああつと表情を輝かせた。

「 哀ちゃん！？え、なに、ちょ、なんのサプライズ！？うつそまさか！俺に会いにきてく ぶふっ」

無表情で歩み寄ると尻尾を振ってへらへらしている顔面に、本当なら今すぐにも破り捨ててしまいたい一枚のプリントを突き付けた。勢い余って叩きつけてしまったのはご愛敬である。

あいたたた…と鼻先を抑えながら寄り目になってそのプリントを認めた黒羽は、げ、という顔をした。

「…これは、」

言って、ぐしゃり、と持っていた部分を握り締めて、にっこり笑って見せる。

「 いったい、どういうことかしら？生徒会長様？」

「哀ちゃん、あたし頑張るからねっ！」

朝登校するなりそう言われて、哀は全く分からずきよとんととしてしまった。

対して目の前の歩美はと言えば、なぜだかわからないがやる気に満ち溢れた目で拳を握りしめている。

「早速なんだけど、原稿考えたの！」

がさごそと鞆を漁って可愛らしいキャラクターがプリントされたメモ帳を取り出し、どうかな変かなと不安げに尋ねてくる歩美に、哀は漸く我に返る。

「あの…吉田、さん？何を、頑張るのかしら？」

「え？」

哀の言葉に、今度は歩美がきよとんとする。

書いていた手を止めて哀をじっと見ると、ぱちぱち目を瞬かせる。そしてしばし沈黙したあと、おずおずと口を開いた。

「もしかして…哀ちゃん、知らない？」

まさか、というニュアンスで聞かれて、なんだかだんだんと嫌な予感がしつつも首を振ると、歩美はあんぐりと口を開けた。
ええなんで？とかいやでも、とかあわあわと動揺しだした歩美を落ちさせるように、落ち着いた声で問いかける。

「いったい何のこと？」

「…えっとね、金曜日に配られたプリント、見た？」

「プリント？」

「あの、落ち着いて聞いてね、」

恐る恐るといった様子で、歩美が切り出す。

再び鞆を探って、一枚のプリントをそつと哀に差し出した。

「 哀ちゃん、生徒会副会長に立候補してる」

歩美の指差したプリントの真ん中あたり。

副会長立候補者、と書かれた文字の直ぐ下に、自分の名前がはつきりと印刷されていた。

「あつれ！哀ちゃん副会長に立候補したんだー、へー。やっぱりなんだかんだ言って俺の傍に居たかった…たたたた！いたいいたいんだけどな哀ちゃん!？」

ぎゅむぎゅむと無言で鼻を削らんばかりにより強くプリントを押し付けられて、黒羽はギブギブ！と声を上げる。

「どうして此処に私の名前が載っているのかしら？これっぽちも身に覚えがないのだけれど、貴方が先日馬鹿げた勧誘を口にしたこと以外には」

「いやー偶然じゃないかな。選挙管理委員のミスとか。生徒会顧問のミスとか」

プリントは離れたものの、にこにここと微笑みを交わしながらの会話は一見すると穏やかに見えるが、周りに居たクラスメイト達は吹きすさぶブリザードを一つ下の美少女の背後に確かに見た。

「ここに来る前に円谷くんと少しお話をしたの。選挙を運営するのは選挙管理委員会だけれど、それ以前に立候補者の認定や推薦者の確認をするのは彼らでも生徒会顧問の先生でもなく生徒会長だなんという興味深いお話を聞いたわ」

「…そ、そう」

それは仕事が早いことで、とか、円谷余計なことを、とぼそりと黒羽が呟く。

「もっと興味深いことに 私の立候補希望届けを持ってきたのが…誰かわかります？黒羽先輩？」

「……あー、俺、かな？」

言い終わる前に、哀は黒羽の顔面に再び思い切りプリントを貼り付けた。

ぶっ！とひしゃげるような声を上げた黒羽を冷たい目で見るともう用はないとばかりに踵を返す。その様はさながら悪霊を札で退散する陰陽師である。

うわあ、と誰かが呟いた。

「とにかく委員会と生徒会顧問の先生に申し出て即刻取り消していただきますので」

淡々とそう述べながら出口へと向かう背中に、顔面を覆うように痛みに呻いていた黒羽がニヤリと笑った。

「へーそっかあ。取り消しちゃうのかあ、可哀想になあ　歩美子ヤン」

わざとらしく大声で言う黒羽の言葉に、出口に差し掛かっていた哀はびたりと足を止める。

「…なんのこと」

「やーほら、哀ちゃんは今日知ったばいけど、このプリント配られ

たの先週の金曜日じゃん？土日一生懸命考えただろうになあと思っ
て、応援演説のゲンコウ」

ひらひらともはやくしゃくしゃになってしまったプリントを泳がせ
ながら、日付の記載された右上部分をこれ見よがしに指し示す。

哀はつかつかと戻って来てそのプリントを奪い取ると、もう一度目
を通した。

さっきは動揺と怒りで碌に目を通さなかったが、それぞれの立候補
者の欄の横に、応援演説者と書かれた欄があった。そして極めつけ
のように、哀の名前の隣には、吉田歩美の名前が書かれている。

応援演説者は立候補者の推薦者あるいは親しい友人が本人同士の同
意でなるものだ。役員選挙直前に行われる演説会、それぞれの立候
補者の直前にその立候補者の紹介を兼ねてアピールスピーチを行う
のだ。

そうになると、今朝一番に歩美が言っていたのは、このことに違いな
い。

「あーあ、可哀想に。いやまあ俺が悪かったのは認めるよ？少しで
も哀ちゃんと一緒に居たいって言う出来心で…悪いことしたナア、
頑張ったんだろうになあ」

「……………」

きゅっと哀が唇を噛むのが見えて、黒羽はいつそう笑みを深めた。

「うん、でも仕方ないよね！哀ちゃんが取取消すって言ったし」

「……っ、貴方っ、性格悪いわよ…！」

ぐっと拳を握りしめて、くちゅくちゅに丸まったプリントを黒羽に投げつけると、哀は来た時と同じようにがらびしゃんと激しい音を立てて扉を閉め教室からあっという間に去って行った。

「いやあ、それほどもー」

にごやかに手を振りながらそれを見送った黒羽に、褒めてない褒めてない、と誰かが呟いた。

t o b e c o u n t i n u e d ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9047j/>

凍て蝶

2010年12月22日11時38分発行